

SiteMinder

iPlanet 用 Web エージェント インストール ガ イド

12.52 SP1



このドキュメント（組み込みヘルプシステムおよび電子的に配布される資料を含む、以下「本ドキュメント」）は、お客様への情報提供のみを目的としたもので、日本 CA 株式会社（以下「CA」）により随時、変更または撤回されることがあります。本ドキュメントは、CA が知的財産権を有する機密情報であり、CA の事前の書面による承諾を受けずに本書の全部または一部を複写、譲渡、変更、開示、修正、複製することはできません。

本ドキュメントで言及されている CA ソフトウェア製品のライセンスを受けたユーザは、社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、当該ソフトウェアに関連する本ドキュメントのコピーを妥当な部数だけ作成できます。ただし、CA のすべての著作権表示およびその説明を当該複製に添付することを条件とします。

本ドキュメントを印刷するまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、上記のライセンスが終了した場合には、お客様は本ドキュメントの全部または一部と、それらを複製したコピーのすべてを破棄したことを、CA に文書で証明する責任を負いません。

準拠法により認められる限り、CA は本ドキュメントを現状有姿のまま提供し、商品性、特定の使用目的に対する適合性、他者の権利に対して侵害のないことについて、黙示の保証も含めいかなる保証もしません。また、本ドキュメントの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の喪失等、いかなる損害（直接損害か間接損害かを問いません）が発生しても、CA はお客様または第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本ドキュメントで参照されているすべてのソフトウェア製品の使用には、該当するライセンス契約が適用され、当該ライセンス契約はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本書の制作者は CA および CA Inc. です。

「制限された権利」のもとでの提供：アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212、52.227-14 及び 52.227-19(c)(1)及び(2)、ならびに DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

Copyright © 2014 CA. All rights reserved. 本書に記載されたすべての商標、商号、サービス・マークおよびロゴは、それぞれの各社に帰属します。

CA Technologies 製品リファレンス

このマニュアルが参照している CA Technologies の製品は以下のとおりです。

- SiteMinder
- CA IdentityMinder™ (旧 CA Identity Manager)
- eTrust SOA Security Manager (旧 CA SOA Security Manager)

CA への連絡先

テクニカルサポートの詳細については、弊社テクニカルサポートの Web サイト (<http://www.ca.com/jp/support/>) をご覧ください。

マニュアルの変更点

以下のドキュメントの更新は、本書の最新のリリース以降に行われたものです。

- [Web エージェントのアンインストール \(P. 79\)](#) - サポートされている JRE のインストールおよびシステム パスへの包含に関連する古いデータを削除しました。JRE は現在、ソフトウェアに含まれています。

目次

第 1 章: 準備	9
このガイド内の Oracle iPlanet Web サーバ設定のみ	9
SiteMinder エージェントのハードウェア要件	10
Oracle iPlanet Web サーバの準備ロードマップ	11
Oracle iPlanet Web Server 上の Web エージェントのインストールを準備する方法	12
プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス	12
UNIX での Oracle iPlanet Web サーバ準備	13
Linux での Oracle iPlanet Web サーバ準備	14
ポリシー サーバ要件	17
第 2 章: Windows での Oracle iPlanet エージェントのインストールおよび構成	21
エージェント インストールとエージェント設定の比較	21
Windows で Oracle iPlanet のエージェントをインストールおよび構成する方法	22
インストールプログラム用の情報を収集します。	22
Windows 上でのインストールプログラムの実行	23
Windows 上の設定プログラムが必要とする情報を収集する	24
Windows 上での Web エージェント設定プログラムの実行	27
Windows 上で後続のエージェントに対して無人またはサイレント インストールおよび設定プログラムを実行する	29
SunOne 6.1 サーバ用 Oracle iPlanet 管理サーバ コンソールを使用して Oracle iPlanet 構成ファイルに SiteMinder 変更を適用する	30
Oracle iPlanet Web サーバのデフォルト以外のサーバ インスタンス、仮想サーバ、またはリバースプロキシを手動で設定する	31
(オプション) httpd.conf ファイル変更でサーバのパフォーマンスを改善する。	34
第 3 章: UNIX/Linux での Oracle iPlanet エージェントのインストールおよび構成	35
エージェント インストールとエージェント設定の比較	35
UNIX/Linux で SiteMinder エージェントを Oracle iPlanet に対してインストールおよび設定する方法	36
インストール用の情報の収集	37
UNIX/Linux 上でのインストールプログラムの実行	38
設定プログラムが UNIX/Linux 上で必要とする情報の収集	39

UNIX または Linux でのエージェント環境スクリプトの取得.....	42
UNIX または Linux でのライブラリパス変数の設定.....	42
UNIX/Linux 上での Web エージェント設定プログラムの実行.....	43
UNIX/Linux 上でエージェントに対して無人またはサイレントインストールおよび設定プログラムを実行する.....	45
SunOne 6.1 サーバ用 Oracle iPlanet 管理サーバ コンソールを使用して Oracle iPlanet 構成ファイルに SiteMinder 変更を適用する.....	46
Oracle iPlanet Web サーバのデフォルト以外のサーバインスタンス、仮想サーバ、またはリバースプロキシを手動で設定する.....	48
サーバ停止時のクラッシュを防ぐために Oracle iPlanet 起動スクリプトを変更する.....	49
第 4 章: ダイナミックポリシー サーバクラスタ	51
ダイナミックポリシーサーバクラスタへの Web エージェントの接続.....	53
第 5 章: Web エージェントの起動と停止	55
Web エージェントの有効化.....	55
Web エージェントの無効化.....	56
第 6 章: Web エージェントを 12.52 SP1 にアップグレードする	57
Oracle iPlanet エージェントのアップグレードのロードマップ.....	58
Oracle iPlanet エージェントをアップグレードする方法.....	59
SiteMinder r6.x からのアップグレード処理.....	60
SiteMinder r12.0 からのアップグレード処理.....	61
LD_PRELOAD 変数が既存のエージェントと矛盾しないことを確認する.....	62
Windows 上でエージェントをアップグレードするためにインストールウィザードを実行する.....	62
UNIX/Linux 上でエージェントをアップグレードするためにインストールウィザードを実行する.....	64
UNIX/Linux のアップグレードの後にエージェント環境スクリプトを取得.....	65
UNIX/Linux 上でアップグレードしたエージェントを設定する前にライブラリパス変数を設定する.....	66
Windows 上でアップグレードしたエージェントを設定する.....	67
UNIX/Linux 上でアップグレードしたエージェントを設定する.....	68
アップグレードした SiteMinder ファイルに iPlanet 管理コンソールを使用して変更を加える.....	69
アップグレードした SiteMinder エージェントのデフォルト以外のサーバインスタンスを手動で設定する.....	70
第 7 章: エージェントに対するオペレーティングシステムの調整	73
共有メモリセグメントの調整.....	74

Solaris 10 リソース管理を調整する方法.....	77
-------------------------------	----

第 8 章: Web エージェントのアンインストール 79

Web エージェントのアンインストールに関する注意事項.....	79
----------------------------------	----

Windows オペレーティング環境からの Web エージェントのアンインストール.....	80
--	----

UNIX システムからの Oracle iPlanet エージェントのアンインストール.....	83
--	----

第 9 章: トラブルシューティング 85

Web サーバは起動するのに Web エージェントが有効にならない.....	85
--	----

Web サーバが開始すると smget エラーメッセージが表示される.....	85
---	----

再設定された Web エージェントが動作しない.....	86
------------------------------	----

Oracle iPlanet Web サーバがランタイムで失敗する.....	86
--	----

英語以外の入力文字にジャンク文字が含まれる.....	87
----------------------------	----

付録 A: ワークシート 89

エージェントインストールワークシート.....	89
-------------------------	----

エージェント設定ワークシート.....	89
---------------------	----

第 1 章: 準備

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[このガイド内の Oracle iPlanet Web サーバ設定のみ \(P. 9\)](#)

[SiteMinder エージェントのハードウェア要件 \(P. 10\)](#)

[Oracle iPlanet Web サーバの準備ロードマップ \(P. 11\)](#)

[Oracle iPlanet Web Server 上の Web エージェントのインストールを準備する方法 \(P. 12\)](#)

このガイド内の Oracle iPlanet Web サーバ設定のみ

このガイドでは、SiteMinder エージェントを Oracle iPlanet Web サーバにインストールまたは設定するための手順についてのみ説明します。

SiteMinder エージェントを他のタイプの Web サーバまたはオペレーティング環境にインストールまたは設定するには、以下のいずれかのガイドを参照してください。

- *Apache* サーバ用 Web エージェント インストール ガイド。
- Domino 用 Web エージェント インストール ガイド。
- IIS 用 Web エージェント インストール ガイド。

SiteMinder エージェントのハードウェア要件

SiteMinder エージェントをホストするコンピュータには以下のハードウェアが必要です。

Windows オペレーティング環境要件

Windows オペレーティング環境で稼働するエージェントは以下のハードウェアを必要とします。

- CPU : x86 または x64
- メモリ : 2 GB のシステム RAM。
- 使用可能なディスク領域 :
 - インストール場所に 2 GB の空きディスク領域。
 - 一時的な場所に .5 GB の空きディスク領域。

UNIX オペレーティング環境要件

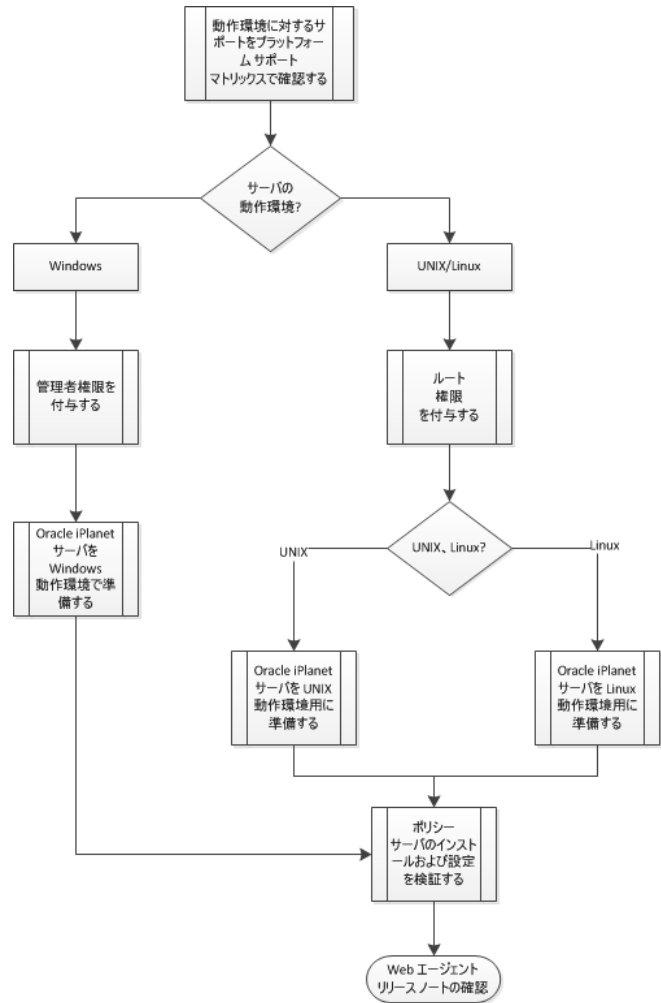
UNIX オペレーティング環境で稼働するエージェントは以下のハードウェアを必要とします。

- CPU :
 - Solaris オペレーティング環境 : SPARC
 - Red Hat オペレーティング環境 : x86 または x64
- メモリ : 2 GB のシステム RAM。
- 使用可能なディスク領域 :
 - インストール場所に 2 GB の空きディスク領域。
 - /tmp 内に .5 GB の空きディスク領域。

注: エージェントの日常運用には、/tmp 内に 10 MB の空きディスク領域が必要です。エージェントは、/tmp の下にファイルおよび名前付きパイプを作成します。これらのファイルおよびパイプが作成されたパスは変更できません。

Oracle iPlanet Web サーバの準備ロードマップ

以下の図は、SiteMinder エージェントをインストールする前に Web サーバを準備する方法を示しています。



Oracle iPlanet Web Server 上の Web エージェントのインストールを準備する方法

Oracle iPlanet サーバ上の SiteMinder エージェント インストールの準備をするには、以下の手順を使用します。

1. [プラットフォーム サポート マトリックスを見つけます](#) (P. 12)。インストールする SiteMinder エージェントのバージョンを Web サーバがサポートしていることを確認します。
2. Web サーバに対して以下のいずれかのタイプの権限を持つアカウントがあることを確認します。
 - 管理者権限 (Windows オペレーティング環境)
 - ルート権限 (UNIX または Linux オペレーティング環境)
3. 以下のリストのいずれかを使用して、SiteMinder エージェントが必要とする適切な追加の設定を構成します。
 - [UNIX オペレーティング環境での Oracle iPlanet Web サーバ準備](#) (P. 13)。
 - [Linux オペレーティング環境での Oracle iPlanet Web サーバ準備](#) (P. 14)。
4. ポリシー サーバが[インストールおよび設定されている](#) (P. 17) ことを確認します。
5. 「Web エージェント リリース ノート」の既知の問題セクションを確認します。

プラットフォーム サポート マトリックスへのアクセス

プラットフォーム サポート マトリックスを使用して、オペレーティング環境および他の必要なサードパーティ コンポーネントがサポートされていることを確認します。

次の手順に従ってください:

1. CA サポート サイトに移動します。
2. [Product Pages] をクリックします。
3. 製品名を入力し、Enter キーを押します。

4. ポピュラーなリンクを開き、 [Informational Documentation Index] をクリックします。
5. [Platform Support Matrices] をクリックします。

注: 最新の JDK および JRE バージョンは、 [Oracle Developer Network](#) でダウンロードできます。

技術パートナーおよび CA によって検証済みの製品

パートナーおよびパートナーによって検証済み製品の最新[リスト](#)

UNIX での Oracle iPlanet Web サーバ準備

UNIX 操作環境上で実行される Oracle iPlanet Web サーバは、 SiteMinder エージェントをインストールする前に以下の準備を必要とします。

1. [display 変数を設定する](#) (P. 13)。
2. 適切なパッチがオペレーティング環境にインストールされていることを確認します。
 - [Solaris パッチ](#) (P. 14)。
 - [AIX の要件](#) (P. 14)。

UNIX 上で SiteMinder エージェント インストールに DISPLAY を設定する

Telnet や Exceed 端末などのリモート端末から UNIX システムに SiteMinder エージェントをインストールする場合は、 DISPLAY 変数がローカルシステムに設定されていることを確認してください。たとえば、マシンが 111.11.1.12 である場合は、以下のように変数を設定します。

```
DISPLAY=111.11.1.12: 0.0
```

```
export DISPLAY
```

注: また、コンソールモードインストールを使用して、エージェントをインストールすることもできます。これには X ウィンドウ表示モードは必要ありません。

必要とされる Solaris パッチ

Solaris コンピュータに SiteMinder エージェントをインストールする前に、以下のパッチをインストールします。

Solaris 9

パッチ 111711-16 が必要です。

Solaris 10

パッチ 119963-08 が必要です。

インストールされたパッチバージョンは、ルートユーザとしてログインして以下のコマンドを実行することにより確認できます。

```
showrev -p | grep patch_id
```

Solaris パッチを検索するには、「Oracle Solution Center」に移動します。

AIX 要件

AIX システム上で実行する SiteMinder エージェントでは以下が必要です。

- AIX システム上で Oracle iPlanet 用の rearchitected (フレームワーク) SiteMinder エージェントを実行するには、C/C++ ランタイム環境がバージョン 8.0.0.0 である必要があります。

Linux での Oracle iPlanet Web サーバ準備

Linux オペレーティング環境上で実行される Oracle iPlanet Web サーバは、SiteMinder エージェントをインストールする前に以下の準備が必要です。

1. 必要なパッチがインストールされていることを確認します。
2. 必要なライブラリがインストールされていることを確認します。

必要とされる Linux パッチ

以下の Linux パッチが必要です。

64 ビット Linux システムで実行する Web エージェント用

- Binutils 2.17
- GCC 4.1.0

必要とされる Linux ライブラリ

Linux オペレーティング環境上で動作するコンポーネントには、特定のライブラリ ファイルが必要です。正しいライブラリをインストールしないと、以下のエラーを引き起こす場合があります。

```
java.lang.UnsatisfiedLinkError
```

このコンポーネントの Linux バージョンをインストール、設定、またはアップグレードする場合は、ホスト システム上で以下のパッケージが必要になります。

Red Hat 5.x

- `compat-gcc-34-c++-3.4.6-patch_version.i386`
- `libstdc++-4.x.x-el5.i686.rpm`
- `libidn.so.11.rpm`
- `ncurses`

Red Hat 6.x

- libstdc++-4.x.x-x.el6.i686.rpm
- libidn-1.18-2.el6.i686
- libXext.i686.rpm
- libXrender.i686.rpm
- linXtst.i686.rpm
- libidn.so.11.rpm
- ncurses

Red Hat 6.x (64 ビット) の場合はさらに以下 :

注: 64 ビット Red Hat 6.x に必要な RPM パッケージはすべて、32 ビットのパッケージです。

- libXau-1.0.5-1.el6.i686.rpm
- libxcb-1.5-1.el6.i686.rpm
- compat-db42-4.2.52-15.el6.i686.rpm
- compat-db43-4.3.29-15.el6.i686.rpm
- libX11-1.3-2.el6.i686.rpm
- libXrender-0.9.5-1.el6.i686.rpm
- libexpat.so.1 (expat-2.0.1-11.el6_2.i686.rpm により提供)
- libfreetype.so.6 (freetype-2.3.11-6.el6_2.9.i686.rpm により提供)
- libfontconfig.so.1 (fontconfig-2.8.0-3.el6.i686.rpm により提供)
- libICE-1.0.6-1.el6.i686.rpm
- libuuid-2.17.2-12.7.el6.i686.rpm
- libSM-1.1.0-7.1.el6.i686.rpm
- libXext-1.1-3.el6.i686.rpm
- compat-libstdc++-33-3.2.3-69.el6.i686.rpm
- compat-db-4.6.21-15.el6.i686.rpm
- libXi-1.3-3.el6.i686.rpm
- libXtst-1.0.99.2-3.el6.i686.rpm
- libXft-2.1.13-4.1.el6.i686.rpm
- libXt-1.0.7-1.el6.i686.rpm

- libXp-1.0.0-15.1.el6.i686.rpm
- libstdc++.i686.rpm
- compat-libtermcap.rpm
- libidn.i686.rpm
- ncurses

ポリシー サーバ要件

以下の条件を確認します。

- ポリシー サーバがインストールされ設定されていることを確認します。
- ポリシー サーバは、エージェントのインストールを計画しているコンピュータと通信できます。

SiteMinder エージェントをインストールおよび設定するには、ポリシー サーバは少なくとも以下のアイテムを必要とします。

- トラステッドホストを登録する権限がある SiteMinder 管理者。

トラステッドホストとは、1つ以上の SiteMinder エージェントがインストールされ、ポリシー サーバに登録されているクライアント コンピュータです。SiteMinder 管理者には、トラステッドホストをポリシー サーバに登録する権限が必要です。トラステッドホストを登録すると、ポリシー サーバ上に一意のトラステッドホスト名オブジェクトが作成されます。

- エージェント識別情報

エージェント識別情報は、ポリシー サーバとエージェントをホストする Web サーバ インスタンスの名前または IP アドレスとの間のマッピングを確立します。管理 UI 内にエージェント オブジェクトからのエージェント ID を定義します。そのエージェント ID に名前を割り当てて、Web エージェントとしてエージェントタイプを指定します。

- ホスト設定オブジェクト (HCO)

ポリシー サーバ上のホスト設定オブジェクトによって、初期接続後の、エージェントとポリシー サーバとの間の通信を定義します。初回接続では、SmHost.conf ファイル内のパラメータを使用します。

- エージェント設定オブジェクト (ACO)

このオブジェクトには、エージェント設定を定義するパラメータが含まれています。すべての SiteMinder エージェントで、ACO で定義される以下の設定パラメータのうち少なくとも 1 つが必要です。

AgentName

Web エージェントの ID を定義します。この ID は、エージェントをホストしている各 Web サーバインスタンスの名前と IP アドレスまたは FQDN をリンクします。

以下のイベントのいずれか発生した場合は、DefaultAgentName の値が AgentName パラメータの代わりに使用されます。

- AgentName パラメータが無効。
- AgentName パラメータの値が空。
- AgentName パラメータの値が既存のエージェント オブジェクトに一致しない。

注: このパラメータは複数の値を持つことができます。エージェント設定オブジェクトでこのパラメータを設定する場合は、複数値オプションを使用します。ローカル設定ファイルについては、ファイル内の個別の行に各値を追加します。

デフォルト: デフォルトなし

制限: 複数の値が許可されていますが、各 AgentName パラメータは 4,000 文字に制限されています。文字をパラメータ名に追加することにより、必要に応じて追加の AgentName パラメータを作成します。たとえば、AgentName、AgentName1、AgentName2 などを作成します。

制限: 32-127 の範囲内に 7 ビット ASCII 文字が含まれている必要があり、1 つ以上の印刷可能文字が含まれている必要があります。アンパサンド (&) およびアスタリスク (*) 文字は含めることができません。この値は大文字と小文字が区別されます。たとえば、MyAgent と myagent という名前は、同じように処理されます。

例: myagent1,192.168.0.0 (IPV4)

例: myagent2, 2001:DB8::/32 (IPV6)

例: myagent,www.example.com

例 (複数の AgentName パラメータ): AgentName1、AgentName2、AgentName3。各 AgentName 数値パラメータの値は、4,000 文字に制限されています。

DefaultAgentName

要求を処理するためにエージェントが使用する名前を定義します。エージェント名値が **AgentName** パラメータに存在しないときは、**DefaultAgentName** の値が IP アドレスまたはインターフェース上の要求に使用されます。

仮想サーバを使用している場合は、**DefaultAgentName** を使用することにより **SiteMinder** 環境を迅速にセットアップできます。

DefaultAgentName を使用することは、各仮想サーバに対して個別のエージェントを定義する必要がないことを意味します。

重要: **DefaultAgentName** パラメータの値を指定しない場合、**AgentName** パラメータの値にはそのリスト内のすべてのエージェント ID が必要です。そうでない場合、ポリシー サーバはエージェントにポリシーを結び付けることができません。

デフォルト: デフォルトなし

制限: 複数の値を指定できます。

制限: 32-127 の範囲内に 7 ビット ASCII 文字が含まれている必要があり、1 つ以上の印刷可能文字が含まれている必要があります。アンパサンド (&) およびアスタリスク (*) 文字は含めることができません。この値は大文字と小文字が区別されます。たとえば、**MyAgent** と **myagent** という名前は、同じように処理されます。

第 2 章: Windows での Oracle iPlanet エージェントのインストールおよび構成

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[エージェントインストールとエージェント設定の比較 \(P. 21\)](#)

[Windows で Oracle iPlanet のエージェントをインストールおよび構成する方法 \(P. 22\)](#)

エージェントインストールとエージェント設定の比較

インストールと設定の概念は、SiteMinder エージェントの説明に使用された場合に特定の意味を持ちます。

インストールは SiteMinder エージェントソフトウェアをコンピュータシステムにインストールすることを意味します。たとえば、エージェントをインストールするとディレクトリが作成され、SiteMinder エージェントソフトウェアおよびその他の設定がコンピュータにコピーされます。

設定はインストールの後に発生し、コンピュータ上の特定の Web サーバに対する SiteMinder エージェントソフトウェア準備のアクションを意味します。この準備には SiteMinder ポリシーサーバにエージェントを登録し、コンピュータにインストールされる Web サーバ用のランタイムサーバインスタンスを作成することが含まれます。

エージェントを最初の Web サーバにインストールおよび設定するには、ウィザードベースのインストールおよび設定プログラムを使用します。ウィザードベースのプログラムは .properties ファイルを作成します。

.properties ファイルおよび対応する実行可能ファイルを使用して、エージェントを追加の Web サーバにサイレントにインストールまたは設定します。

Windows で Oracle iPlanet のエージェントをインストールおよび構成する方法

Oracle iPlanet の SiteMinder エージェントのインストールおよび設定には、いくつかの個別の手順が必要になります。Oracle iPlanet のエージェントをインストールおよび設定するには、以下のプロセスを使用します。

1. [インストールプログラム用の情報を収集する \(P. 22\)](#)。
2. [ウィザードベースのインストールプログラムを実行する \(P. 23\)](#)。
3. [設定プログラム用の情報を収集する \(P. 24\)](#)。
4. [ウィザードベースの設定プログラムを実行する \(P. 27\)](#)。
5. [\(オプション\) Oracle iPlanet の追加のエージェントをサイレントにインストールおよび設定する \(P. 29\)](#)。
6. Oracle iPlanet のエージェントが以下の追加の設定手順のいずれかを必要とするかどうか判断します。
 - (SunOne 6.1 Web サーバのみ) Oracle iPlanet 管理サーバコンソールを使用する場合は、[Oracle iPlanet Web サーバの設定ファイルに SiteMinder 変更を適用する \(P. 30\)](#)。
 - (SunOne/Sun Java 7.0 Web サーバを除く) [SiteMinder に対して任意のデフォルト以外のサーバインスタンス、リバースプロキシまたは仮想サーバを手動で設定する \(P. 31\)](#)。
 - [\(オプション\) httpd.conf ファイル変更でサーバのパフォーマンスを改善する \(P. 34\)](#)。

インストールプログラム用の情報を収集します。

エージェントのインストールプログラムを実行する前に、Web サーバに関する以下の情報を収集します。

インストール ディレクトリ

Web サーバ上のエージェント バイナリ ファイルの場所を指定します。`web_agent_home` 変数はこの場所に設定されます。

制限： この製品では、パス内の最下部のディレクトリに「webagent」という名前を付ける必要があります。

Windows 上でのインストールプログラムの実行

エージェントのインストールプログラムは **Windows** オペレーティング環境を使用して、一度に **1** 台のコンピュータにエージェントをインストールします。このインストールプログラムはウィザードまたはコンソールモードで実行できます。ウィザードおよびコンソールベースのインストールプログラムは、同じ設定の無人またはサイレントメソッドを使用して、後続のインストールおよび設定のための **.properties** ファイルも作成します。

たとえば、環境内のエージェントが同じ **Web** サーババージョン、インストールディレクトリ、エージェント設定オブジェクト、およびポリシーサーバを使用すると仮定します。最初のインストールにはインストールウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムを使用します。その後、ウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムが作成した **.properties** ファイルを有するインストールプログラムを実行するために独自のスクリプトを作成できます。

次の手順に従ってください:

1. **Web** サーバ上の一時ディレクトリに **Web** エージェントインストール実行可能ファイルをコピーします。
2. 以下のいずれかを実行します。
 - ウィザードベースのインストールでは、インストール実行可能ファイルを右クリックし、次に、[管理者として実行] を選択します。
 - コンソールベースのインストールでは、コマンドラインウィンドウを開き、以下の例に示すとおり実行可能ファイルを実行します。

```
executable_file_name.exe -i console
```
3. 事前に収集した情報を使用してインストールを完了します。

Windows 上の設定プログラムが必要とする情報を収集する

エージェントの設定プログラムを実行する前に、製品の環境に関する以下の情報を収集します。

ホストの登録

トラステッドホストを登録するかどうかを示します。この登録は、Web サーバ上のポリシーサーバおよび `SmHost.conf` ファイルでトラステッドホストオブジェクトを作成します。エージェントは、起動時にポリシーサーバへの初期接続を行うためにこの情報を使用します。トラステッドホストとして各エージェントインスタンスを 1 回のみ登録します。

デフォルト：はい

オプション：はい、いいえ

管理者ユーザ名

ポリシーサーバですでに定義されている管理者権限を持った SiteMinder ユーザの名前を指定します。この SiteMinder ユーザアカウントは、トラステッドホストを登録する権限を必要とします。

Admin Password

ポリシーサーバですでに定義されている管理者ユーザ名用にパスワードを指定します。

管理者パスワードの確認

[管理者パスワード] フィールドに入力したパスワードを繰り返します。この値は、ポリシーサーバですでに定義されている管理者ユーザ名用のパスワードを確認します。

トラステッドホストオブジェクト名

登録するトラステッドホスト用の任意の名前を指定します。このトラステッドホストオブジェクトがポリシーサーバ上に格納されます。

ホスト設定オブジェクト

ポリシーサーバですでに定義されているホスト設定オブジェクトの名前を指定します。エージェントがポリシーサーバ (`SmHost.conf` ファイル設定を使用して) に最初接続した後、後続の接続は [ホスト設定オブジェクト] からの設定を使用します。

ポリシー サーバ IP アドレス

エージェントが起動時に試みるポリシー サーバのインターネット プロトコルアドレスを指定します。ポリシー サーバがファイアウォールの内側にある場合は、ポート番号も指定します。

単一の仮想 IP アドレス (VIP) によってユーザの環境でポリシー サーバを公開するようにハードウェア ロードバランサが設定されている場合は、VIP を入力します。

例： (IPV4) 192.168.1.105

例： (ポート番号がある IPV4) 192.168.1.105:44443

例： (IPV6) 2001:DB8::/32

例： (IPV6) [2001:DB8::/32]:44443

FIPS モード設定

以下のいずれかのアルゴリズムを指定します。

FIPS 互換性/AES 互換性

機密データを暗号化するために以前のバージョンの SiteMinder に存在していたアルゴリズムを使用し、以前のバージョンの SiteMinder と互換性があります。組織が FIPS 準拠のアルゴリズムの使用を必要としない場合は、このオプションを使用します。

FIPS 移行/AES 移行

FIPS 互換性モードから FIPS のみのモードへの移行を許可します。FIPS 移行モードでは、SiteMinder 環境は、FIPS 準拠のアルゴリズムを使用して既存の機密データを再暗号化するときに、既存の SiteMinder 暗号化アルゴリズムを引き続き使用します。

FIPS のみ/AES のみ

FIPS 準拠アルゴリズムのみを使用して、SiteMinder 環境で機密データを暗号化します。この設定は、SiteMinder の旧バージョンと相互運用されず、また下位互換性もありません。

デフォルト： FIPS 互換/AES 互換

FIPS は、AES (Advanced Encryption Standard、高度暗号化標準) に適合する暗号モジュールを信用する米国政府のコンピュータ セキュリティ標準です。

重要: SiteMinder エージェントおよびポリシー サーバの両方に互換性のある FIPS/AES モード (または互換モードの組み合わせ) を使用します。

名前

ポリシー サーバへの初期接続を行うために Web エージェントが使用する設定が含まれている `SmHost.conf` ファイルの名前を指定します。

デフォルト: `SmHost.conf`

場所

`SmHost.conf` ファイルが格納されているディレクトリを指定します。

デフォルト: `web_agent_home¥config`

共有秘密キーのロールオーバーの有効化

このチェック ボックスをオンにして、ポリシー サーバが Web エージェントへの通信を暗号化するのに使用する共有秘密キーを変更します。

サーバの選択

この手順では複数の画面が表示されます。最初の画面にはサーバタイプ (Apache) が表示され、次の画面には設定プログラムがコンピュータ上で検索する Web サーバインスタンスを表示します。サーバタイプのチェック ボックスをオンにし、設定するインスタンスを選択します。SiteMinder 保護を解除したいインスタンスのチェック ボックスをオフにします。

Apache 2.4.x インストール場所

Apache ベースのサーバ (バージョン 2.4 以上) 用のインストール ディレクトリの場所を指定します。

エージェント設定オブジェクト名

ポリシー サーバ上ですでに定義されている、エージェント設定オブジェクト (ACO) の名前を指定します。

デフォルト: `AgentObj`

高度な認証方式のダイアログ

以前に選択した Web サーバインスタンス用の高度な認証方式を指定します。

Windows 上での Web エージェント設定プログラムの実行

エージェント設定用の情報を収集した後、エージェント設定プログラムを実行します。このプログラムは、コンピュータ上で実行される Web サーバ用のエージェント ランタイム インスタンスを作成します。

この設定プログラムは、選択するオプションに応じてウィザードまたはコンソールベースになります。ウィザードまたはコンソールモード内の設定プログラムを 1 回実行すると、プロパティファイルが作成されます。同じオペレーティング環境を持った他のコンピュータ上で無人設定を今後実行するためにプロパティファイルを使用します。

次の手順に従ってください:

1. Web サーバで以下のディレクトリを開きます。

```
web_agent_home¥install_config_info
```

```
web_agent_home
```

SiteMinder エージェントが Web サーバにインストールされるディレクトリを示します。

デフォルト (Windows32 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>¥webagent

デフォルト (Windows64 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>¥webagent¥win64

デフォルト (64 ビット システム [Wow64] 上で作動する Windows32 ビット アプリケーション) : C:¥Program Files (x86)¥webagent¥win32

2. 以下のいずれかのメソッドを使用します。
 - GUI ベースの設定については、手順 3 に移動します。
 - コンソールベースの設定については、手順 5 に移動します。
3. 以下の実行可能ファイルを右クリックし、次に、[管理者として実行]を選択します。

```
ca-wa-config.exe
```

4. 手順 8 に進みます。
5. 管理者権限を使用してコマンドプロンプト ウィンドウを開きます。
6. 以前にリスト表示された実行可能ファイルに移動し、以下のスイッチで実行します。

```
-i console
```

7. 手順 8 に進みます。
8. 設定プログラムで示されるプロンプトに従います。エージェント設定ワークシートからリクエストされた値を提供します。
エージェントランタイム インスタンスが Web サーバに対して作成されます。

Windows 上で後続のエージェントに対して無人またはサイレント インストールおよび設定プログラムを実行する

無人またはサイレント インストール オプションは、インストールおよび設定プロセスを自動化するのに役立ちます。同一の設定を持つ多くのエージェントを使用する大型の SiteMinder 環境がある場合、このメソッドによって時間を節約できます。

たとえば、環境内のエージェントが同じ Web サーババージョン、インストールディレクトリ、エージェント設定オブジェクト、およびポリシーサーバを使用すると仮定します。最初のインストールにはインストールウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムを使用します。その後、ウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムが作成した .properties ファイルを有するインストールプログラムを実行するために独自のスクリプトを作成できます。

次の手順に従ってください:

1. 最初の Web サーバ上で以下のウィザードを実行します (表示されるおりの順序)。
 - a. SiteMinderWeb エージェント インストール ウィザード。
 - b. SiteMinderWeb エージェント設定ウィザード。
2. 最初の Web サーバで以下のファイルを見つけます。

`web_agent_home¥install_config_info¥ca-wa-installer.properties`

注: パスにスペースが含まれる場合は、引用符で囲んでください。

`web_agent_home`

SiteMinder エージェントが Web サーバにインストールされるディレクトリを示します。

デフォルト (Windows32 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>¥webagent

デフォルト (Windows64 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>¥webagent¥win64

デフォルト (64 ビット システム [Wow64] 上で作動する Windows32 ビット アプリケーション) : C:¥Program Files (x86)¥webagent¥win32

3. 環境内の他の Web サーバ上で以下の各手順を実行します。

注: このプロセスを自動化するには、カスタマイズした独自のスクリプトを作成し、システム上でこれらのファイルを実行します。使用するスクリプト言語は任意です。

- a. 後続の Web サーバ上で一時ディレクトリを作成します。
 - b. 最初の Web サーバ（手順 1 および 2）から後続の Web サーバ上の一時ディレクトリに以下のファイルをコピーします。
 - SiteMinderWeb エージェント インストール実行可能ファイル。
 - SiteMinderca-wa-installer properties ファイル。
 - c. 一時ディレクトリ内で管理者権限を使用してコマンドプロンプトウィンドウを開きます。
 - d. 以下のコマンドを実行します。

```
agent_executable -f properties_file -i silent
```

後続のサーバに SiteMinder エージェントがサイレントにインストールおよび設定されます。
 - e. （オプション）後続の Web サーバから一時ディレクトリを削除します。
4. ca-wa-installer.properties ファイルの設定で指定される構成を使用する SiteMinder 環境内の各追加の Web サーバに対して手順 3 を繰り返します。

SunOne 6.1 サーバ用 Oracle iPlanet 管理サーバコンソールを使用して Oracle iPlanet 構成ファイルに SiteMinder 変更を適用する

エージェント設定ウィザードは、デフォルトの obj.conf と Oracle iPlanet Web サーバが使用する mime.types ファイルを変更します。

SunOne Web サーバのバージョン 6.1 を使用しており、Oracle iPlanet 管理コンソールの使用を計画している場合は、コンソールを使用する前にこれらのファイルに変更を適用します。最初にコンソールを使用して変更を適用しないと、SiteMinder 設定に対して加えられる変更の問題が生じる場合があります。設定を失った場合は、設定プログラムを再度実行します。

注: エージェントは、高度な認証方式をサポートするように設定されている場合に Oracle iPlanet Web サーバの obj.conf ファイルへ設定を追加します。SiteMinder はこれらの設定を後で削除しません。使用されなくなった設定を削除するには、obj.conf ファイルを手動で編集します。

次の手順に従ってください:

1. Oracle iPlanet 管理サーバ コンソールにログインします。
2. [サーバ] タブから、SiteMinder エージェントがインストールされている Web サーバを選択し、[管理] をクリックします。
3. ダイアログ ボックスの右端で、[適用] をクリックします。

変更された設定ファイルのロードに関する警告メッセージが表示されます。

4. [設定ファイルのロード] をクリックします。
5. コンソールを終了します。
6. Web サーバを再起動します。
7. 共有メモリ セグメントを調整することにより Oracle iPlanet のエージェントを最適化します。
SiteMinder 変更が適用されます。

詳細情報

[再設定された Web エージェントが動作しない \(P. 86\)](#)

Oracle iPlanet Web サーバのデフォルト以外のサーバ インスタンス、仮想サーバ、またはリバース プロキシを手動で設定する

SiteMinder Web エージェント設定ウィザードでは、Oracle iPlanet Web サーバのデフォルト インスタンスのみを設定します。SiteMinder 用 Oracle iPlanet Web サーバの別のインスタンスを設定するには、そのサーバ インスタンスと関連付けられる `obj.conf` ファイルを手動で編集します。手動設定を必要とするサーバ インスタンスの例を以下に示します。

- デフォルト以外のディレクトリにインストールされたサーバ
- リバース プロキシとして設定するサーバ。 `obj.conf` ファイルに SiteMinder 設定を追加する *前に*、Oracle iPlanet インターフェースを使用してリバース プロキシを設定することをお勧めします。

注: SiteMinder エージェント設定ウィザードは、Oracle iPlanet (以前の Sun Java System) Web サーバ上のデフォルトの `obj.conf` ファイルのみを変更します。SiteMinder で他のインスタンスまたはリバースプロキシ展開を保護するには、デフォルトの `obj.conf` ファイルから、対応する `<instance_name>-obj.conf` ファイルに SiteMinder 設定をコピーします。たとえば、Web サーバのインストール時に `obj.conf` ファイルが作成されましたが、その後 `my_server.example.com` という名前のサーバインスタンスを追加したとします。SiteMinder で `my_server.example.com` 上のリソースを保護するには、`obj.conf` ファイルから `my_server.example.com-obj.conf` ファイルに、ウィザードによって追加された SiteMinder 設定をコピーします。

- 同じコンピュータにある仮想サーバ

注: SunOne/Sun Java 7.0 Web サーバではこれらの手動による設定手順は必要ありません。

次の手順に従ってください:

1. 設定するサーバインスタンスのディレクトリを検索します。
2. `obj.conf` ファイルをテキストエディタで開きます。
3. 次の行を検索します。
`<Object name="default">`
4. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。
`AuthTrans fn="SiteMinderAgent"`
5. 次の行を検索します。
`AuthTrans fn="match-browser" browser="*MSIE*" ssl-unclean-shutdown="true"`
6. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。
`NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/pwcgi" dir="web_agent_home/pw" name="cgi"`
`NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/pw" dir="web_agent_home/pw"`
`NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/jpw" dir="web_agent_home/jpw"`
`NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/redirectjsp" dir="web_agent_home/affwebservices/redirectjsp"`

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/certooptional"
dir="web_agent_home/samples"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent" dir="web_agent_home/samples"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/pwservlet"
dir=web_agent_home/jpw"
```

web_agent_home

SiteMinder エージェントが Web サーバにインストールされるディレクトリを示します。

デフォルト (Windows32 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>%webagent

デフォルト (Windows64 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>%webagent%win64

デフォルト (64 ビット システム [Wow64] 上で作動する Windows32 ビット アプリケーション) : C:%Program Files (x86)%webagent%win32

7. 次の行を検索します。

```
NameTrans fn="ntrans-j2ee" name="j2ee"
```

8. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。

```
PathCheck fn="SmRequireAuth"
```

9. 以下の行を削除します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/mc-icons" dir="C:/Program
Files/Sun/WebServer7.0/lib/icons" name="es-internal"
```

10. 次の行を検索します。

```
ObjectType fn="force-type" type="text/plain"
```

11. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。

```
Service method="(GET|POST)" fn="SmAdvancedAuth"
```

12. obj.conf ファイルを保存します。

Oracle iPlanet Web サーバは手動設定されました。

(オプション) httpd.conf ファイル変更でサーバのパフォーマンスを改善する。

httpd.conf ファイルのデフォルト構成設定を変更することで、サーバのパフォーマンスを改善できますが、これらの変更は必須ではありません。

次の手順に従ってください:

1. Oracle iPlanet Web サーバでは、Web サーバ上の他の認証モジュールまたはアクセス モジュールよりも高い優先度レベルを Apache20WebAgent.dll ファイルに割り当てます。
2. トラフィックが少ない Web サイトについては、以下のディレクティブを定義します。
 - Set MaxRequestsPerChild>1000 または Set MaxRequestsPerChild=0
 - MinSpareServers >5
 - MaxSpareServers>10
 - StartServers=MinSpareServers>5
3. トラフィックが多い Web サイトについては、以下のディレクティブを定義します。
 - Set MaxRequestsPerChild>3000 または Set MaxRequestsPerChild=0
 - MinSpareServers >10
 - MaxSpareServers>15
 - StartServers=MinSpareServers>10

第 3 章: UNIX/Linux での Oracle iPlanet エージェントのインストールおよび構成

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[エージェント インストールとエージェント設定の比較 \(P. 35\)](#)

[UNIX/Linux で SiteMinder エージェントを Oracle iPlanet に対してインストールおよび設定する方法 \(P. 36\)](#)

エージェント インストールとエージェント設定の比較

インストールと設定の概念は、SiteMinder エージェントの説明に使用された場合に特定の意味を持ちます。

インストールは SiteMinder エージェント ソフトウェアをコンピュータ システムにインストールすることを意味します。たとえば、エージェントをインストールするとディレクトリが作成され、SiteMinder エージェント ソフトウェアおよびその他の設定がコンピュータにコピーされます。

設定はインストールの後に発生し、コンピュータ上の特定の Web サーバに対する SiteMinder エージェント ソフトウェア準備のアクションを意味します。この準備には SiteMinder ポリシー サーバにエージェントを登録し、コンピュータにインストールされる Web サーバ用のランタイム サーバインスタンスを作成することが含まれます。

エージェントを最初の Web サーバにインストールおよび設定するには、ウィザードベースのインストールおよび設定プログラムを使用します。ウィザードベースのプログラムは `.properties` ファイルを作成します。

`.properties` ファイルおよび対応する実行可能ファイルを使用して、エージェントを追加の Web サーバにサイレントにインストールまたは設定します。

UNIX/Linux で SiteMinder エージェントを Oracle iPlanet に対してインストールおよび設定する方法

Oracle iPlanet の SiteMinder エージェントのインストールおよび設定には、いくつかの個別の手順が必要になります。Oracle iPlanet のエージェントをインストールおよび設定するには、以下のプロセスを使用します。

1. [インストールプログラム用の情報を収集する](#) (P. 37)。
2. [ウィザードベースのインストールプログラムを実行する](#) (P. 38)。
3. [設定プログラム用の情報を収集する](#) (P. 39)。
4. [エージェント環境スクリプトを用意する](#) (P. 42)。
5. [ライブラリパス変数を設定する](#) (P. 42)。
6. [ウィザードベースの設定プログラムを実行する](#) (P. 43)。
7. (オプション) [Oracle iPlanet の追加のエージェントをサイレントにインストールおよび設定する](#) (P. 45)。
8. Oracle iPlanet のエージェントが以下の追加の設定手順のいずれかを必要とするかどうか判断します。
 - (SunOne 6.1 Web サーバのみ) Oracle iPlanet 管理サーバコンソールを使用する場合は、[Oracle iPlanet Web サーバの設定ファイルに SiteMinder 変更を適用する](#) (P. 46)。
 - (SunOne 7.0/Sun Java 7.0 Web サーバを除く) [SiteMinder に対して任意のデフォルト以外のサーバインスタンス、リバースプロキシまたは仮想サーバを手動で設定する](#) (P. 48)。
 - Solaris 9 SP3 および Solaris 10 では、[起動スクリプトを変更する](#) (P. 49)。

インストール用の情報の収集

エージェントのインストールプログラムを実行する前に、Web サーバに関する以下の情報を収集します。

インストール ディレクトリ

Web サーバ上のエージェント バイナリ ファイルの場所を指定します。
`web_agent_home` 変数はこの場所に設定されます。

制限： この製品では、パス内の最下部のディレクトリに「webagent」という名前を付ける必要があります。

UNIX/Linux 上でのインストールプログラムの実行

SiteMinder エージェント用のインストールプログラムは、UNIX または Linux オペレーティング環境を使用して、エージェントを一度に 1 台のコンピュータにインストールします。このインストールプログラムはウィザードまたはコンソールモードで実行できます。ウィザードおよびコンソールベースのインストールプログラムは、同じ設定の無人またはサイレントメソッドを使用して、後続のインストールおよび設定に対する `.properties` ファイルも作成します。

たとえば、環境内のエージェントが同じ Web サーババージョン、インストールディレクトリ、エージェント設定オブジェクト、およびポリシーサーバを使用すると仮定します。最初のインストールにはインストールウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムを使用します。その後、ウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムが作成した `.properties` ファイルを有するインストールプログラムを実行するために独自のスクリプトを作成できます。

次の手順に従ってください:

1. Web サーバ上の一時ディレクトリに SiteMinder エージェント インストール実行可能ファイルをコピーします。
2. root ユーザとしてログインします。
3. 以下のいずれかを実行します。
 - ウィザードベースのインストールについては、インストール実行可能ファイルを実行します。
 - コンソールベースのインストールでは、コマンドライン ウィンドウを開いて実行可能ファイルを以下の例で示されるとおりに実行します。

```
executable_file_name.exe -i console
```
4. インストールプログラムを完了するためにエージェント インストールワークシートからの情報を使用します。

設定プログラムが UNIX/Linux 上で必要とする情報の収集

エージェントの設定プログラムを実行する前に、製品の環境に関する以下の情報を収集します。

ホストの登録

トラステッドホストを登録するかどうかを示します。この登録は、Web サーバ上のポリシーサーバおよび `SmHost.conf` ファイルでトラステッドホストオブジェクトを作成します。エージェントは、起動時にポリシーサーバへの初期接続を行うためにこの情報を使用します。トラステッドホストとして各エージェントインスタンスを1回のみ登録します。

デフォルト：はい

オプション：Yes、No

管理者ユーザ名

ポリシーサーバですでに定義されている管理者権限を持った SiteMinder ユーザの名前を指定します。この SiteMinder ユーザアカウントは、トラステッドホストを登録する権限を必要とします。

管理者パスワード

ポリシーサーバですでに定義されている管理者ユーザ名用にパスワードを指定します。

管理者パスワードの確認

[管理者パスワード] フィールドに入力したパスワードを繰り返します。この値は、ポリシーサーバですでに定義されている管理者ユーザ名用のパスワードを確認します。

トラステッドホストオブジェクト名

登録するトラステッドホスト用の任意の名前を指定します。このトラステッドホストオブジェクトがポリシーサーバ上に格納されます。

ホスト設定オブジェクト

ポリシーサーバですでに定義されているホスト設定オブジェクトの名前を指定します。エージェントがポリシーサーバ (`SmHost.conf` ファイル設定を使用して) に最初接続した後、後続の接続は [ホスト設定オブジェクト] からの設定を使用します。

ポリシー サーバ IP アドレス

エージェントが起動時に試みるポリシー サーバのインターネット プロトコル アドレスを指定します。ポリシー サーバがファイアウォールの内側にある場合は、ポート番号も指定します。

単一の仮想 IP アドレス (VIP) によってユーザの環境でポリシーサーバを公開するようにハードウェア ロードバランサが設定されている場合は、VIP を入力します。

例：(IPV4) 192.168.1.105

例：(ポート番号がある IPV4) 192.168.1.105:44443

例：(IPV6) 2001:DB8::/32

例：(IPV6) [2001:DB8::/32]:44443

FIPS モード設定

以下のいずれかのアルゴリズムを指定します。

FIPS 互換性/AES 互換性

機密データを暗号化するために以前のバージョンの SiteMinder に存在していたアルゴリズムを使用し、以前のバージョンの SiteMinder と互換性があります。組織が FIPS 準拠のアルゴリズムの使用を必要としない場合は、このオプションを使用します。

FIPS 移行/AES 移行

FIPS 互換性モードから FIPS のみのモードへの移行を許可します。FIPS 移行モードでは、SiteMinder 環境は、FIPS 準拠のアルゴリズムを使用して既存の機密データを再暗号化するときに、既存の SiteMinder 暗号化アルゴリズムを引き続き使用します。

FIPS のみ/AES のみ

FIPS 準拠アルゴリズムのみを使用して、SiteMinder 環境で機密データを暗号化します。この設定は、SiteMinder の旧バージョンと相互運用されず、また下位互換性もありません。

デフォルト: FIPS 互換/AES 互換

FIPS は、AES (Advanced Encryption Standard、高度暗号化標準) に適合する暗号モジュールを信用する米国政府のコンピュータ セキュリティ標準です。

重要: SiteMinder エージェントおよびポリシー サーバの両方に互換性のある FIPS/AES モード (または互換モードの組み合わせ) を使用します。

名前

ポリシー サーバへの初期接続を行うために Web エージェントが使用する設定が含まれている `SmHost.conf` ファイルの名前を指定します。

デフォルト : `SmHost.conf`

場所

`SmHost.conf` ファイルが格納されているディレクトリを指定します。

デフォルト : `web_agent_home¥config`

共有秘密キーのロールオーバーの有効化

このチェック ボックスをオンにして、ポリシー サーバが Web エージェントへの通信を暗号化するのに使用する共有秘密キーを変更します。

サーバの選択

設定プログラムがコンピュータ上で検索する Web サーバインスタンスを示します。設定したいインスタンスのチェック ボックスをオンにします。SiteMinder 保護を解除したいインスタンスのチェック ボックスをオフにします。

エージェント設定オブジェクト名

ポリシー サーバ上ですでに定義されている、エージェント設定オブジェクト (ACO) の名前を指定します。

デフォルト : `AgentObj`

高度な認証方式のダイアログ

以前に選択した Web サーバインスタンス用の高度な認証方式を指定します。

UNIX または Linux でのエージェント環境スクリプトの取得

エージェントのインストールプログラムは以下のディレクトリで環境スクリプトを作成します。

`web_agent_home/ca_wa_env.sh`

`web_agent_home`

SiteMinder エージェントがインストールされているディレクトリを示します。

デフォルト (UNIX/Linux インストール) : `/opt/ca/webagent`

ほとんどの Apache ベースの Web サーバでは、以下のいずれのタスクを行った後にこのスクリプトを取得します。

- エージェント設定プログラムの実行。
- Web サーバの起動。

注: 同じシェル内で以前のタスクをすべて実行する場合は、スクリプトを 1 回のみ取得します。

RedHat Linux に含まれる埋め込み Apache Web サーバの場合は、以下のいずれかのタスクを実行します。

- httpd サービスを開始する前にスクリプトを取得します。
- 以下のファイル内のスクリプトを取得します (毎回手動で開始する場合を除きます)。

`/etc/init.d/httpd`

UNIX または Linux でのライブラリパス変数の設定

エージェント設定プログラムを実行する前に UNIX または Linux システム上でライブラリパス変数を設定します。

以下の表は、さまざまな UNIX および Linux オペレーティング環境用のライブラリパス変数のリストを示しています。

オペレーティング システム	ライブラリパス変数の名前
AIX	LIBPATH

オペレーティング システム	ライブラリ パス変数の名前
Linux	LD_LIBRARY_PATH
Solaris	LD_LIBRARY_PATH

ライブラリ パス変数の値を `web_agent_home/bin` ディレクトリに設定します。

`web_agent_home`

SiteMinder エージェントがインストールされているディレクトリを示します。

デフォルト (UNIX/Linux インストール) : `/opt/ca/webagent`

UNIX/Linux 上での Web エージェント設定プログラムの実行

エージェント設定用の情報を収集した後、エージェント設定プログラムを実行します。このプログラムは、コンピュータ上で実行される Web サーバ用のエージェント ランタイム インスタンスを作成します。

この設定プログラムは、選択するオプションに応じてウィザードまたはコンソールベースになります。ウィザードまたはコンソールモード内の設定プログラムを 1 回実行すると、プロパティファイルが作成されます。同じオペレーティング環境を持った他のコンピュータ上で無人設定を今後実行するためにプロパティファイルを使用します。

次の手順に従ってください:

1. Web サーバで以下のディレクトリを開きます。

`web_agent_home/install_config_info`

`web_agent_home`

SiteMinder エージェントがインストールされているディレクトリを示します。

デフォルト (UNIX/Linux インストール) : `/opt/ca/webagent`

2. 以下のいずれかのメソッドを使用します。
 - GUI ベースの設定については、手順 3 に移動します。
 - コンソールベースの設定については、手順 5 に移動します。

3. 以下の実行可能ファイルを実行します。

```
ca-wa-config.bin
```

4. 手順 8 に進みます。
5. root 権限を使用してコマンドプロンプト ウィンドウを開きます。
6. 以前にリスト表示された実行可能ファイルに移動し、以下のスイッチで実行します。

```
-i console
```

7. 手順 8 に進みます。
8. 設定プログラムで示されるプロンプトに従います。エージェント設定ワークシートからリクエストされた値を提供します。

エージェントランタイムインスタンスが Web サーバに対して作成されます。

UNIX/Linux 上でエージェントに対して無人またはサイレント インストールおよび設定プログラムを実行する

無人またはサイレント インストール オプションは、インストールおよび設定プロセスを自動化するのに役立ちます。同一の設定を持つ多くのエージェントを使用する大型の SiteMinder 環境がある場合、このメソッドによって時間を節約できます。

たとえば、環境内のエージェントが同じ Web サーババージョン、インストールディレクトリ、エージェント設定オブジェクト、およびポリシーサーバを使用すると仮定します。最初のインストールにはインストールウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムを使用します。その後、ウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムが作成した .properties ファイルを有するインストールプログラムを実行するために独自のスクリプトを作成できます。

次の手順に従ってください:

1. 最初の Web サーバ上で以下のウィザードを実行します (表示されるおりの順序)。
 - a. SiteMinderWeb エージェント インストール ウィザード。
 - b. SiteMinderWeb エージェント設定ウィザード。
2. 最初の Web サーバで以下のファイルを見つけます。

`web_agent_home/install_config_info/ca-wa-installer.properties`

注: パスにスペースが含まれる場合は、引用符で囲んでください。

`web_agent_home`

SiteMinder エージェントがインストールされているディレクトリを示します。

デフォルト (UNIX/Linux インストール) : `/opt/ca/webagent`

3. 後続の Web サーバ上で以下の手順をそれぞれ実行します。

注: このプロセスを自動化するには、カスタマイズした独自のスクリプトを作成し、システム上でこれらのファイルを実行します。使用するスクリプト言語は任意です。

- a. 後続の Web サーバ上で一時ディレクトリを作成します。
- b. ウィザードを実行した (手順 1 および 2) Web サーバから後続の Web サーバ上の一時ディレクトリに以下のファイルをコピーします。

- SiteMinderWeb エージェント インストール実行可能ファイル。
 - SiteMinderca-wa-installer properties ファイル。
- c. 一時ディレクトリ内でルート権限を使用してコマンドプロンプトウィンドウを開きます。
 - d. 以下のコマンドを実行します。

```
agent_executable.bin -f properties_file -i silent
```

Web サーバに SiteMinder エージェントがサイレントにインストールおよび設定されます。
 - e. (オプション) Web サーバから一時ディレクトリを削除します。
4. ca-wa-installer.properties ファイルの設定で指定される構成を使用する SiteMinder 環境内の各追加の Web サーバに対して手順 3 を繰り返します。

SunOne 6.1 サーバ用 Oracle iPlanet 管理サーバコンソールを使用して Oracle iPlanet 構成ファイルに SiteMinder 変更を適用する

エージェント設定ウィザードは、デフォルトの `obj.conf` と Oracle iPlanet Web サーバが使用する `mime.types` ファイルを変更します。

SunOne Web サーバのバージョン 6.1 を使用しており、Oracle iPlanet 管理コンソールの使用を計画している場合は、コンソールを使用する *前*にこれらのファイルに変更を適用します。最初にコンソールを使用して変更を適用しないと、SiteMinder 設定に対して加えられる変更に問題が生じる場合があります。設定を失った場合は、設定プログラムを再度実行します。

注: エージェントは、高度な認証方式をサポートするように設定されている場合に Oracle iPlanet Web サーバの `obj.conf` ファイルへ設定を追加します。SiteMinder はこれらの設定を後で削除しません。使用されなくなった設定を削除するには、`obj.conf` ファイルを手動で編集します。

次の手順に従ってください:

1. Oracle iPlanet 管理サーバ コンソールにログインします。
2. [サーバ] タブから、SiteMinder エージェントがインストールされている Web サーバを選択し、[管理] をクリックします。
3. ダイアログ ボックスの右端で、[適用] をクリックします。

変更された設定ファイルのロードに関する警告メッセージが表示されます。

4. [設定ファイルのロード] をクリックします。
5. コンソールを終了します。
6. Web サーバを再起動します。
7. 共有メモリ セグメントを調整することにより Oracle iPlanet のエージェントを最適化します。

SiteMinder 変更が適用されます。

詳細情報:

[再設定された Web エージェントが動作しない \(P. 86\)](#)

Oracle iPlanet Web サーバのデフォルト以外のサーバ インスタンス、仮想サーバ、またはリバース プロキシを手動で設定する

SiteMinder Web エージェント設定ウィザードでは、Oracle iPlanet Web サーバのデフォルト インスタンスのみを設定します。SiteMinder 用 Oracle iPlanet Web サーバの別のインスタンスを設定するには、そのサーバ インスタンスと関連付けられる `obj.conf` ファイルを手動で編集します。手動設定を必要とするサーバ インスタンスの例を以下に示します。

- デフォルト以外のディレクトリにインストールされたサーバ
- リバース プロキシとして設定するサーバ。 `obj.conf` ファイルに SiteMinder 設定を追加する *前に*、Oracle iPlanet インターフェースを使用してリバース プロキシを設定することをお勧めします。

注: SiteMinder エージェント設定ウィザードは、Oracle iPlanet (以前の Sun Java System) Web サーバ上のデフォルトの `obj.conf` ファイルのみを変更します。SiteMinder で他のインスタンスまたはリバース プロキシ展開を保護するには、デフォルトの `obj.conf` ファイルから、対応する `<instance_name>-obj.conf` ファイルに SiteMinder 設定をコピーします。たとえば、Web サーバのインストール時に `obj.conf` ファイルが作成されましたが、その後 `my_server.example.com` という名前のサーバ インスタンスを追加したとします。SiteMinder で `my_server.example.com` 上のリソースを保護するには、`obj.conf` ファイルから `my_server.example.com-obj.conf` ファイルに、ウィザードによって追加された SiteMinder 設定をコピーします。

- 同じコンピュータにある仮想サーバ

注: SunOne 7.0 Web サーバではこれらの手動による設定手順は必要ありません。

次の手順に従ってください:

1. 設定するサーバ インスタンスのディレクトリを検索します。
2. `obj.conf` ファイルをテキスト エディタで開きます。
3. 次の行を検索します。

```
<Object name="default">
```
4. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。

```
AuthTrans fn="SiteMinderAgent"
```
5. 次の行を検索します。

```
AuthTrans fn="match-browser" browser="*MSIE*" ssl-unclean-shutdown="true"
```

6. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/pwcgi" dir="web_agent_home/pw"
name="cgi"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/pw" dir="web_agent_home/pw"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/jpw" dir="web_agent_home/jpw"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/redirectjsp"
dir="web_agent_home/affwebservices/redirectjsp"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/certoptional"
dir="web_agent_home/samples"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent" dir="web_agent_home/samples"
7. 次の行を検索します。
NameTrans fn="ntrans-j2ee" name="j2ee"
8. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。
PathCheck fn="SmRequireAuth"
9. 以下の行を削除します。
NameTrans fn="pfx2dir" from="/mc-icons" dir="C:/Program
Files/Sun/WebServer7.0/lib/icons" name="es-internal"
10. 次の行を検索します。
ObjectType fn="force-type" type="text/plain"
11. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。
Service method="(GET|POST)" fn="SmAdvancedAuth"
12. obj.conf ファイルを保存します。
Oracle iPlanet Web サーバは手動設定されました。

サーバ停止時のクラッシュを防ぐために Oracle iPlanet 起動スクリプトを変更する

以下のオペレーティング環境でシャットダウンするとき、Oracle iPlanet サーバがクラッシュする場合があります。

- Solaris 9 SP3
- Solaris 10

startserv スクリプトを変更して、Oracle iPlanet Web サーバがシャットダウン時にクラッシュするのを防ぎます。

次の手順に従ってください:

1. テキストエディタで以下のファイルを開きます。

```
sunone_instance_directory/bin/startserv
sunone_instance_directory
```

SunOne Web サーバインスタンスのディレクトリを示します。

2. 次の行を検索します。

```
LIBUMEM_32=/usr/lib/libumem.so
```

3. 前の行の最初にコメント文字を追加します。以下の例を参照してください。

```
#LIBUMEM_32=/usr/lib/libumem.so
```

4. 次の行を検索します。

```
LIBUMEM_64=/usr/lib/64/libumem.so
```

5. 前の行の最初にコメント文字を追加します。以下の例を参照してください。

```
#LIBUMEM_64=/usr/lib/64/libumem.so
```

6. ファイルを保存し、テキストエディタを閉じます。

Oracle iPlanet 起動スクリプトが変更されます。

第 4 章: ダイナミックポリシー サーバクラスタ

旧バージョンの SiteMinder エージェントは、ポリシー サーバがクラスタに追加されたり、クラスタから削除されたりした時期を自動的に検出しませんでした。エージェントは、Web サーバが再起動された後にしか変更を認識しませんでした。

SiteMinder12.52 SP1 は動的ポリシー サーバクラスタをサポートします。動的ポリシー サーバクラスタを有効にすると、既存クラスタに対するポリシー サーバの追加または削除がエージェントによって自動検出されません。

たとえば、エージェントが以下のポリシー サーバのクラスタに接続しているとします。

- 192.168.2.100
- 192.168.2.101
- 192.168.2.103
- 192.168.2.104

オペレーティング システムをアップグレードするためにサーバ 192.168.2.103 を削除することを後で決めたとします。この状況では、動的なポリシー サーバクラスタを有効にすると、エージェントはクラスタのメンバシップの変更を再起動なしに認識することができます。

以下のタスクのいずれかを実行する場合は、**Web** サーバを再起動します。

- 既存のポリシー サーバの設定を変更します (設定ウィザードを使用)。
- ポリシー サーバ クラスタの作成
- ポリシー サーバ クラスタの削除
- 以下のいずれかのポリシー サーバ設定値の変更：
 - EnableFailOver
 - MaxSocketsPerPort
 - MinSocketsPerPort
 - NewSocketStep
 - RequestTimeout

ダイナミックポリシー サーバクラスタへの Web エージェントの接続

Web サーバ上の SmHost.conf ファイルを変更することで、1 つ以上のダイナミックポリシーサーバクラスタに Web エージェントを接続することができます。

次の手順に従ってください：

1. テキストエディタで以下のファイルを開きます。

```
web_agent_home¥config¥SmHost.conf
```

```
web_agent_home
```

SiteMinder エージェントが Web サーバにインストールされるディレクトリを示します。

デフォルト (Windows32 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>¥webagent

デフォルト (Windows64 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>¥webagent¥win64

デフォルト (64 ビット システム [Wow64] 上で作動する Windows32 ビット アプリケーション) : C:¥Program Files (x86)¥webagent¥win32

2. 以下のタスクのいずれかを実行します。

この Web エージェントがポリシーサーバの動的なクラスタに一度も接続されたことがない場合は、以下のテキストを使用して (ファイル内の任意の場所に) 行を作成します。

```
enableDynamicHCO="YES"
```

- この Web エージェントが以前にポリシーサーバのダイナミッククラスタに接続されていた場合は、既存の enableDynamicHCO パラメータの値を「NO」から「YES」に変更します。

1. SmHost.conf ファイルを保存し、テキストエディタを閉じます。
2. Web サーバを再起動します。

Web エージェントはダイナミックポリシーサーバクラスタに接続されました。

第 5 章: Web エージェントの起動と停止

Web エージェントの有効化

エージェントのパラメータを設定して、エージェントが Web サーバ上のリソースを保護できるようにします。

注: SiteMinder ポリシー サーバにポリシーも定義するまでは、リソースは保護されません。

次の手順に従ってください:

1. WebAgent.conf ファイルをテキスト エディタで開きます。

注: 64 ビット オペレーティング環境にインストールされた IIS 用エージェントには、2 つの WebAgent.conf ファイルがあります。1 つのファイルは 32 ビット Windows アプリケーション用です。もう 1 つのファイルは 64 ビット Windows アプリケーション用です。IIS 用エージェントを起動または停止する場合は、*両方*の WebAgent.conf ファイルを変更します。

2. EnableWebAgent パラメータの値を **yes** に変更します。
3. WebAgent.conf ファイルを保存して閉じます。
4. Web サーバ (サーバが実行されるコンピュータではなく Web サーバ自体) を再起動します。

Web エージェントが有効になります。

詳細情報:

[サーバ停止時のクラッシュを防ぐために Oracle iPlanet 起動スクリプトを変更する \(P. 49\)](#)

Web エージェントの無効化

Web エージェントによる Web サーバ上のリソースの保護を停止する場合は、Web エージェントを無効にします。

次の手順に従ってください:

1. WebAgent.conf ファイルをテキスト エディタで開きます。

注: 64 ビット オペレーティング環境にインストールされた IIS 用エージェントには、2 つの WebAgent.conf ファイルがあります。1 つのファイルは 32 ビット Windows アプリケーション用です。もう 1 つのファイルは 64 ビット Windows アプリケーション用です。IIS 用エージェントを起動または停止する場合は、*両方*の WebAgent.conf ファイルを変更します。

2. EnableWebAgent パラメータの値を no に変更します。
3. WebAgent.conf ファイルを保存して閉じます。
4. Web サーバ (サーバが実行されるコンピュータではなく Web サーバ自体) を再起動します。

Web エージェントが無効になります。

第 6 章: Web エージェントを 12.52 SP1 にアップグレードする

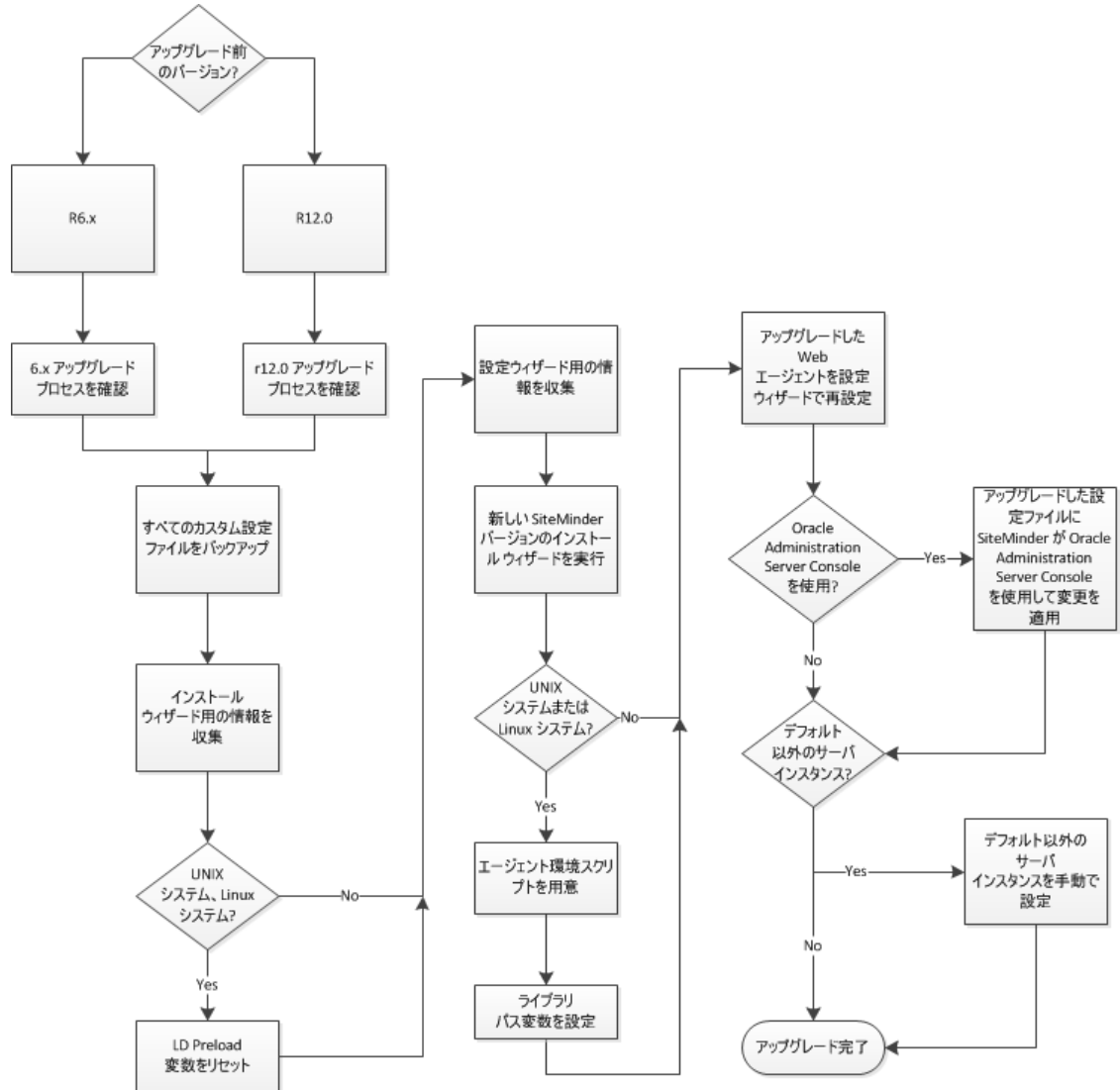
このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Oracle iPlanet エージェントのアップグレードのロードマップ \(P. 58\)](#)

[Oracle iPlanet エージェントをアップグレードする方法 \(P. 59\)](#)

Oracle iPlanet エージェントのアップグレードのロードマップ

以下の図は、Oracle iPlanet の SiteMinder エージェント を r12.5 にアップグレードする方法について説明しています。



Oracle iPlanet エージェントをアップグレードする方法

Oracle iPlanet の SiteMinder エージェントのアップグレードには、いくつかの個別の手順が必要です。エージェントのアップグレードの準備をするには、次の手順に従ってください：

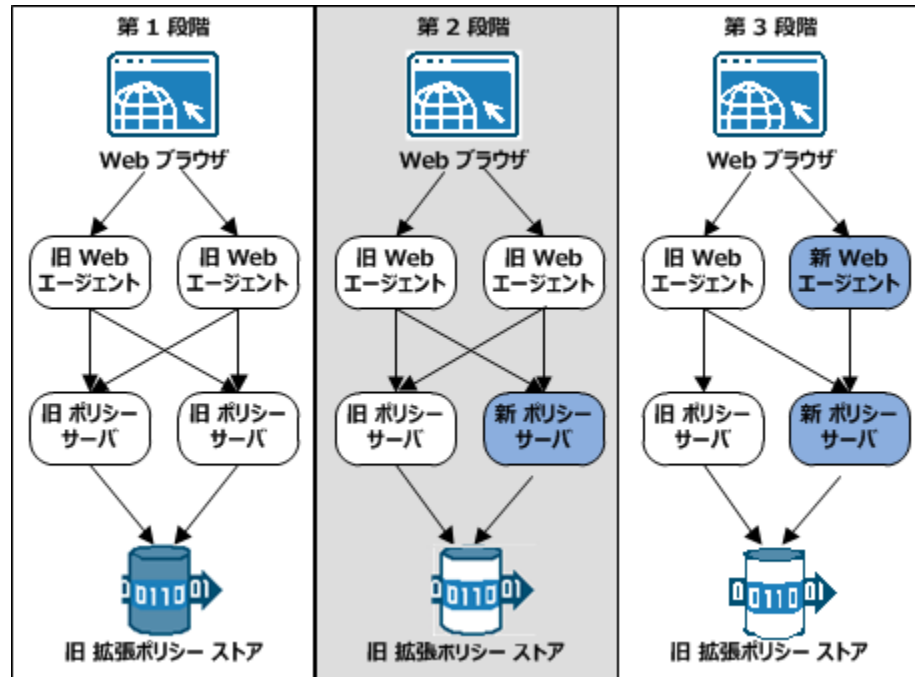
1. 以下の図のいずれかを使用して、エージェントのアップグレードで適切な SiteMinder アップグレード手順を使用していることを確認します。
 - r6.x からのアップグレード処理。
 - r12.0 からのアップグレード処理。
2. Web サーバ上で任意のカスタマイズされた SiteMinder ファイルのバックアップコピーを作成します。エージェントのインストールまたは設定後にカスタマイズできるファイルには以下のファイルが含まれます。
 - LocalConfig.conf
 - WebAgent.conf
3. 以下の SiteMinder プログラムの情報を収集します。
 - エージェント インストール ウィザード。
 - エージェント設定ウィザード。
4. UNIX/Linux オペレーティング環境でエージェントをアップグレードする場合は、[LD PRELOAD 変数をクリア \(P. 62\)](#) します。その他の場合は、次の手順へ進んでください。
5. エージェントをアップグレードするには以下のいずれかの手順を使用します。
 - [Windows オペレーティング環境用のインストール ウィザードを実行する \(P. 62\)](#)。
 - [UNIX/Linux オペレーティング環境用のインストール ウィザードを実行する \(P. 64\)](#)。
6. UNIX/Linux オペレーティング環境でエージェントをアップグレードする場合は以下の手順を実行します(その他の場合は手順 7 へ進みます)。
 - [アップグレードされたエージェント上のエージェント環境スクリプトを用意する \(P. 65\)](#)。
 - [LD LIBRARYPATH 変数を設定する \(P. 66\)](#)。
7. アップグレードされたエージェントを設定するために以下の手順のいずれかを実行します。

- [Windows オペレーティング環境上のアップグレードされたエージェントを設定する \(P. 67\)。](#)
 - [UNIX/Linux オペレーティング環境上のアップグレードされたエージェントを設定する \(P. 68\)。](#)
8. Oracle iPlanet 管理コンソールを使用することを計画する場合は、[アップグレードされた SiteMinder 設定ファイルに変更を適用する \(P. 69\)。](#)
 9. 任意の[デフォルト以外の Oracle iPlanet サーバインスタンス \(P. 70\)](#)を手動で設定する。

SiteMinder r6.x からのアップグレード処理

以下の例に示されるように、r6.x から 12.52 SP1 へのエージェントアップグレードが SiteMinder アップグレードプロセスの手順 3 で発生します。

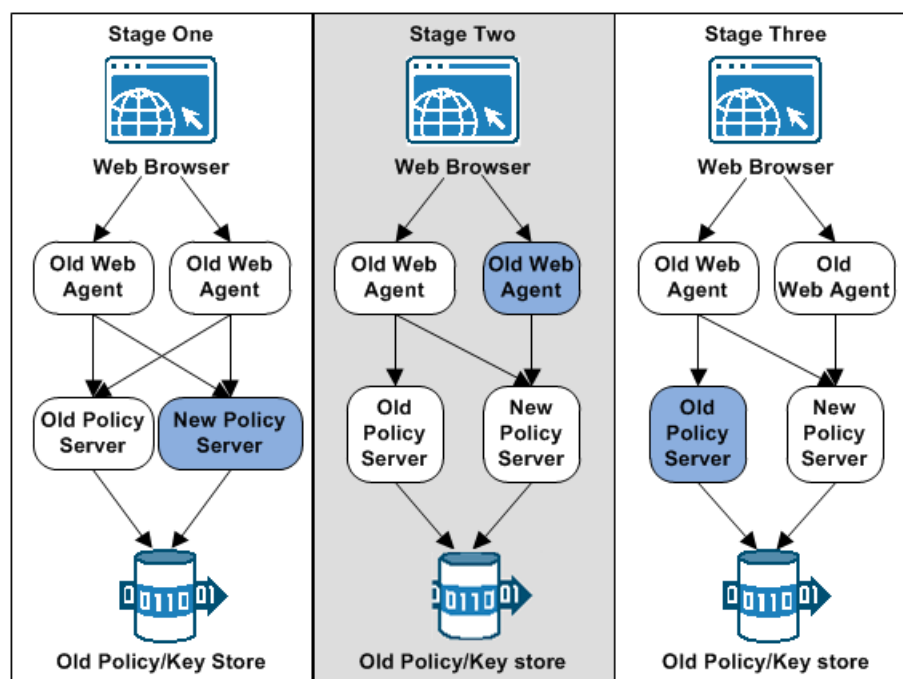
図1: r6 SP5 移行。第1段階～第3段階。



SiteMinder r12.0 からのアップグレード処理

以下の例に示されるように、r12.x から 12.52 SP1 へのエージェントアップグレードが SiteMinder アップグレードプロセスの手順 2 で発生します。

図 2: r12.x 移行の概要。



LD_PRELOAD 変数が既存のエージェントと矛盾しないことを確認する

シェルから Linux システム上の Web エージェントをアップグレードまたは再インストールする場合は、既存の Web エージェントインストールディレクトリとは別の場所を指すように、LD_PRELOAD 変数を設定します。たとえば、既存の LD_PRELOAD エントリが以下のように設定されているとします。

```
LD_PRELOAD=web_agent_home/bin/libbtunicode.so
```

再インストールまたはアップグレードする前に、以下のように変数を設定します。

```
export LD_PRELOAD=
```

このエントリは変数を空の値に設定します。

Windows 上でエージェントをアップグレードするためにインストール ウィザードを実行する

エージェントのインストールプログラムは Windows オペレーティング環境を使用して、一度に 1 台のコンピュータにエージェントをインストールします。このインストールプログラムはウィザードまたはコンソールモードで実行できます。ウィザードおよびコンソールベースのインストールプログラムは、同じ設定の無人またはサイレントメソッドを使用して、後続のインストールおよび設定のための `.properties` ファイルも作成します。

たとえば、環境内のエージェントが同じ Web サーババージョン、インストールディレクトリ、エージェント設定オブジェクト、およびポリシーサーバを使用すると仮定します。最初のインストールにはインストールウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムを使用します。その後、ウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムが作成した `.properties` ファイルを有するインストールプログラムを実行するために独自のスクリプトを作成できます。

次の手順に従ってください:

1. Web サーバ上の一時ディレクトリに Web エージェント インストール 実行可能ファイルをコピーします。
2. 以下のいずれかを実行します。
 - ウィザードベースのインストールでは、インストール実行可能ファイルを右クリックし、次に、[管理者として実行] を選択します。
 - コンソールベースのインストールでは、コマンドライン ウィンドウを開き、以下の例に示すとおり実行可能ファイルを実行します。

```
executable_file_name.exe -i console
```
3. 事前に収集した情報を使用してインストールを完了します。

UNIX/Linux 上でエージェントをアップグレードするためにインストール ウィザードを実行する

SiteMinder エージェント用のインストールプログラムは、UNIX または Linux オペレーティング環境を使用して、エージェントを一度に 1 台のコンピュータにインストールします。このインストールプログラムはウィザードまたはコンソールモードで実行できます。ウィザードおよびコンソールベースのインストールプログラムは、同じ設定の無人またはサイレントメソッドを使用して、後続のインストールおよび設定に対する `.properties` ファイルも作成します。

たとえば、環境内のエージェントが同じ Web サーババージョン、インストールディレクトリ、エージェント設定オブジェクト、およびポリシーサーバを使用すると仮定します。最初のインストールにはインストールウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムを使用します。その後、ウィザードまたはコンソールベースのインストールプログラムが作成した `.properties` ファイルを有するインストールプログラムを実行するために独自のスクリプトを作成できます。

次の手順に従ってください:

1. Web サーバ上の一時ディレクトリに SiteMinder エージェントインストール実行可能ファイルをコピーします。
2. root ユーザとしてログインします。
3. 以下のいずれかを実行します。
 - ウィザードベースのインストールについては、インストール実行可能ファイルを実行します。
 - コンソールベースのインストールでは、コマンドラインウィンドウを開いて実行可能ファイルを以下の例で示されるとおりに実行します。

```
executable_file_name.exe -i console
```

4. インストールプログラムを完了するためにエージェントインストールワークシートからの情報を使用します。

UNIX/Linux のアップグレードの後にエージェント環境スクリプトを取得

エージェントのインストールプログラムは以下のディレクトリで環境スクリプトを作成します。

`web_agent_home/ca_wa_env.sh`

`web_agent_home`

SiteMinder エージェントがインストールされているディレクトリを示します。

デフォルト (UNIX/Linux インストール) : `/opt/ca/webagent`

ほとんどの Apache ベースの Web サーバでは、以下のいずれのタスクを行った後にこのスクリプトを取得します。

- エージェント設定プログラムの実行。
- Web サーバの起動。

注: 同じシェル内で以前のタスクをすべて実行する場合は、スクリプトを 1 回のみ取得します。

RedHat Linux に含まれる埋め込み Apache Web サーバの場合は、以下のいずれかのタスクを実行します。

- httpd サービスを開始する前にスクリプトを取得します。
- 以下のファイル内のスクリプトを取得します (毎回手動で開始する場合を除きます)。

`/etc/init.d/httpd`

UNIX/Linux 上でアップグレードしたエージェントを設定する前にライブラリパス変数を設定する

エージェント設定プログラムを実行する前に UNIX または Linux システム上でライブラリパス変数を設定します。

以下の表は、さまざまな UNIX および Linux オペレーティング環境用のライブラリパス変数のリストを示しています。

オペレーティングシステム	ライブラリパス変数の名前
AIX	LIBPATH
Linux	LD_LIBRARY_PATH
Solaris	LD_LIBRARY_PATH

ライブラリパス変数の値を `web_agent_home/bin` ディレクトリに設定します。

`web_agent_home`

SiteMinder エージェントがインストールされているディレクトリを示します。

デフォルト (UNIX/Linux インストール) : `/opt/ca/webagent`

Windows 上でアップグレードしたエージェントを設定する

エージェント設定用の情報を収集した後、エージェント設定プログラムを実行します。このプログラムは、コンピュータ上で実行される Web サーバ用のエージェント ランタイム インスタンスを作成します。

この設定プログラムは、選択するオプションに応じてウィザードまたはコンソールベースになります。ウィザードまたはコンソールモード内の設定プログラムを 1 回実行すると、プロパティファイルが作成されます。同じオペレーティング環境を持った他のコンピュータ上で無人設定を今後実行するためにプロパティファイルを使用します。

次の手順に従ってください:

1. Web サーバで以下のディレクトリを開きます。

```
web_agent_home¥install_config_info
```

```
web_agent_home
```

SiteMinder エージェントが Web サーバにインストールされるディレクトリを示します。

デフォルト (Windows32 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>¥webagent

デフォルト (Windows64 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>¥webagent¥win64

デフォルト (64 ビット システム [Wow64] 上で作動する Windows32 ビット アプリケーション) : C:¥Program Files (x86)¥webagent¥win32

2. 以下のいずれかのメソッドを使用します。
 - GUI ベースの設定については、手順 3 に移動します。
 - コンソールベースの設定については、手順 5 に移動します。
3. 以下の実行可能ファイルを右クリックし、次に、[管理者として実行]を選択します。

```
ca-wa-config.exe
```

4. 手順 8 に進みます。
5. 管理者権限を使用してコマンドプロンプト ウィンドウを開きます。
6. 以前にリスト表示された実行可能ファイルに移動し、以下のスイッチで実行します。

```
-i console
```

- 手順 8 に進みます。
- 設定プログラムで示されるプロンプトに従います。エージェント設定ワークシートからリクエストされた値を提供します。

エージェントランタイム インスタンスが Web サーバに対して作成されます。

UNIX/Linux 上でアップグレードしたエージェントを設定する

エージェント設定用の情報を収集した後、エージェント設定プログラムを実行します。このプログラムは、コンピュータ上で実行される Web サーバ用のエージェントランタイム インスタンスを作成します。

この設定プログラムは、選択するオプションに応じてウィザードまたはコンソールベースになります。ウィザードまたはコンソールモード内の設定プログラムを 1 回実行すると、プロパティファイルが作成されます。同じオペレーティング環境を持った他のコンピュータ上で無人設定を今後実行するためにプロパティファイルを使用します。

次の手順に従ってください:

- Web サーバで以下のディレクトリを開きます。

```
web_agent_home/install_config_info
```

```
web_agent_home
```

SiteMinder エージェントがインストールされているディレクトリを示します。

デフォルト (UNIX/Linux インストール) : /opt/ca/webagent

- 以下のいずれかのメソッドを使用します。
 - GUI ベースの設定については、手順 3 に移動します。
 - コンソールベースの設定については、手順 5 に移動します。
- 以下の実行可能ファイルを実行します。

```
ca-wa-config.bin
```

- 手順 8 に進みます。
- root 権限を使用してコマンドプロンプト ウィンドウを開きます。

6. 以前にリスト表示された実行可能ファイルに移動し、以下のスイッチで実行します。

```
-i console
```

7. 手順 8 に進みます。
8. 設定プログラムで示されるプロンプトに従います。エージェント設定ワークシートからリクエストされた値を提供します。

エージェントランタイムインスタンスが Web サーバに対して作成されます。

アップグレードした SiteMinder ファイルに iPlanet 管理コンソールを使用して変更を加える

エージェント設定ウィザードは、デフォルトの `obj.conf` と Oracle iPlanet Web サーバが使用する `mime.types` ファイルを変更します。

SunOne Web サーバのバージョン 6.1 を使用しており、Oracle iPlanet 管理コンソールの使用を計画している場合は、コンソールを使用する前にこれらのファイルに変更を適用します。最初にコンソールを使用して変更を適用しないと、SiteMinder 設定に対して加えられる変更の問題が生じる場合があります。設定を失った場合は、設定プログラムを再度実行します。

注: エージェントは、高度な認証方式をサポートするように設定されている場合に Oracle iPlanet Web サーバの `obj.conf` ファイルへ設定を追加します。SiteMinder はこれらの設定を後で削除しません。使用されなくなった設定を削除するには、`obj.conf` ファイルを手動で編集します。

次の手順に従ってください:

1. Oracle iPlanet 管理サーバコンソールにログインします。
2. [サーバ] タブから、SiteMinder エージェントがインストールされている Web サーバを選択し、[管理] をクリックします。
3. ダイアログボックスの右端で、[適用] をクリックします。
変更された設定ファイルのロードに関する警告メッセージが表示されます。
4. [設定ファイルのロード] をクリックします。

5. コンソールを終了します。
6. Web サーバを再起動します。
7. 共有メモリ セグメントを調整することにより Oracle iPlanet のエージェントを最適化します。
SiteMinder 変更が適用されます。

アップグレードした SiteMinder エージェントのデフォルト以外のサーバ インスタンスを手動で設定する

SiteMinder Web エージェント設定ウィザードでは、Oracle iPlanet Web サーバのデフォルト インスタンスのみを設定します。SiteMinder 用 Oracle iPlanet Web サーバの別のインスタンスを設定するには、そのサーバインスタンスと関連付けられる `obj.conf` ファイルを手動で編集します。手動設定を必要とするサーバインスタンスの例を以下に示します。

- デフォルト以外のディレクトリにインストールされたサーバ
- リバース プロキシとして設定するサーバ。 `obj.conf` ファイルに SiteMinder 設定を追加する *前に*、Oracle iPlanet インターフェースを使用してリバース プロキシを設定することをお勧めします。

注: SiteMinder エージェント設定ウィザードは、Oracle iPlanet（以前の Sun Java System） Web サーバ上のデフォルトの `obj.conf` ファイルのみを変更します。SiteMinder で他のインスタンスまたはリバース プロキシ展開を保護するには、デフォルトの `obj.conf` ファイルから、対応する `<instance_name>-obj.conf` ファイルに SiteMinder 設定をコピーします。たとえば、Web サーバのインストール時に `obj.conf` ファイルが作成されましたが、その後 `my_server.example.com` という名前のサーバインスタンスを追加したとします。SiteMinder で `my_server.example.com` 上のリソースを保護するには、`obj.conf` ファイルから `my_server.example.com-obj.conf` ファイルに、ウィザードによって追加された SiteMinder 設定をコピーします。

- 同じコンピュータにある仮想サーバ

注: SunOne/Sun Java 7.0 Web サーバではこれらの手動による設定手順は必要ありません。

次の手順に従ってください:

1. 設定するサーバインスタンスのディレクトリを検索します。
2. `obj.conf` ファイルをテキストエディタで開きます。
3. 次の行を検索します。

```
<Object name="default">
```

4. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。

```
AuthTrans fn="SiteMinderAgent"
```

5. 次の行を検索します。

```
AuthTrans fn="match-browser" browser="*MSIE*" ssl-unclean-shutdown="true"
```

6. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/pwcgi" dir="web_agent_home/pw"
name="cgi"
```

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/pw" dir="web_agent_home/pw"
```

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/jpw" dir="web_agent_home/jpw"
```

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/redirectjsp"
dir="web_agent_home/affwebservices/redirectjsp"
```

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/certoptional"
dir="web_agent_home/samples"
```

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent" dir="web_agent_home/samples"
```

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/siteminderagent/pwservlet"
dir="web_agent_home/jpw"
```

`web_agent_home`

SiteMinder エージェントが Web サーバにインストールされるディレクトリを示します。

デフォルト (Windows32 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>%webagent

デフォルト (Windows64 ビット インストールのみ) : <アクセスパス>%webagent%win64

デフォルト (64 ビット システム [Wow64] 上で作動する Windows32 ビット アプリケーション) : C:%Program Files (x86)%webagent%win32

7. 次の行を検索します。

```
NameTrans fn="ntrans-j2ee" name="j2ee"
```

8. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。

```
PathCheck fn="SmRequireAuth"
```

9. 以下の行を削除します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/mc-icons" dir="C:/Program  
Files/Sun/WebServer7.0/lib/icons" name="es-internal"
```

10. 次の行を検索します。

```
ObjectType fn="force-type" type="text/plain"
```

11. 前の行の下に新しい行を挿入し、次に、以下のテキストを追加します。

```
Service method="(GET|POST)" fn="SmAdvancedAuth"
```

12. obj.conf ファイルを保存します。

Oracle iPlanet Web サーバは手動設定されました。

第 7 章: エージェントに対するオペレーティングシステムの調整

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[共有メモリ セグメントの調整 \(P. 74\)](#)

[Solaris 10 リソース管理を調整する方法 \(P. 77\)](#)

共有メモリ セグメントの調整

Oracle iPlanet エージェントを Solaris システムにインストールする場合は、エージェントが正しく機能するようにオペレーティング環境の共有メモリ設定を調整します。共有メモリ セグメントまたはオペレーティング環境を増やすことによって、エージェントのパフォーマンスが向上します。共有メモリ セグメントをコントロールする変数はオペレーティング環境の指定ファイルで定義されます。

AIX オペレーティング環境では、Oracle iPlanet Web サーバを開始する前に以下のコマンドを実行します。

```
export EXTSHM=ON
```

注: Linux オペレーティング環境では共有メモリ セグメントの調整が必要となる場合があります。共有メモリ セグメント、およびそれらを調整する方法の詳細については、特定のオペレーティング環境のドキュメントを参照してください。

次の手順に従ってください:

1. ご使用のオペレーティング環境に該当する手順に従ってください。
 - Solaris: 任意のエディタを使用して、`/etc/system` ファイルを開きます。
2. 以下の方法のうちの 1 つを使用して、共有メモリ変数を変更します。
 - Solaris: 以下のリストに表示された変数を追加し、例に表示された、推奨設定を使用して、それらを設定します。以下の構文を使用します。

```
set shmsys:shminfo_shmmax=33554432
```

```
shmsys:shminfo_shmmax
```

最大の共有メモリ セグメント サイズを指定します。エージェントのリソースおよびセッション キャッシュの最大サイズを制御します。

注: 必要なメモリ セグメントの量を概算するために、各キャッシュに 4 KB/エントリを割り当てるか、または OneView モニタでキャッシュ使用状況の統計を表示します。OneView モニタを使用する方法の詳細については、「Web エージェント設定ガイド」を参照してください。

例：大きなキャッシュ容量を必要とするビジーなサイトには
33554432（32 MB）。

shmsys:shminfo_shmmin

（Solaris では必要なし）最小の共有メモリ セグメントサイズ。
エージェントのリソースおよびセッション キャッシュの最小サイ
ズを制御します。

shmsys:shminfo_shmmni

システム全体で、同時に存在できる共有メモリ セグメントの最大数を指定します。

例：（Solaris 9 以外） N/A

例：（Solaris 9） 200

shmsys:shminfo_shmseg

（Solaris 9 では必要なし）プロセスごとの共有メモリ セグメントの最大数を指定します。

例： 24

semsys:seminfo_semmni

セマフォ識別子の数を指定します。システムで実行するエージェントのすべてのインスタンスに 11 を使用します。

例：（Solaris 9 以外） 100

例：（Solaris 9） 200

semsys:seminfo_semmns

システムのセマフォの数を指定します。システムで実行するエージェントのすべてのインスタンスに 10 を使用します。

例：（Solaris 9） 100

例：（Solaris 9） 400

semsys:seminfo_semmnu

undo 機能を使用して、プロセスの数を指定します。最適なパフォーマンスを得るには、semmnu 値をシステムで一度に実行する Oracle iPlanet Web サーバプロセスの数よりも大きくする必要があります。maxprocs 設定を 200 以上増やします。

例：（Solaris 9） 200

3. 変更を保存してファイルまたはユーティリティを終了します。
4. システムを再起動します。
5. コマンドを入力して変更を検証します。

```
$ sysdef -i
```

Solaris 10 リソース管理を調整する方法

エージェントのパフォーマンスを改善するためにプロジェクト レベルでリソース管理を調整します。

注: 詳細については、Solaris のマニュアルを参照してください。

Solaris 10 でリソース管理を調整する場合は、以下のプロセスを使用します。

1. Web エージェントが実行されるユーザ アカウントに関連付けられたプロジェクトを特定します。
2. そのプロジェクトの以下のリソース管理のうちのいずれかの設定を増加します。

`project.max-shm-ids`

プロジェクトの最大共有メモリ ID を指定します。

`project.max-sem-ids`

プロジェクトのセマフォ ID の最大数を指定します。

`project.max-msg-ids`

プロジェクトのメッセージキュー ID の最大数を指定します。

`project.max-shm-memory`

プロジェクトに許可された共有メモリの合計金額を指定します。

`process.max-sem-nsems`

セマフォ セットごとに許可されたセマフォの最大数を指定します。

`process.max-sem-ops`

`semop` ごとに許可されたセマフォ操作の最大数を指定します。

`process.max-msg-messages`

メッセージキューのメッセージの最大数を指定します。

`process.max-msg-qbytes`

メッセージキューのメッセージの最大バイト数を指定します。

第 8 章: Web エージェントのアンインストール

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Web エージェントのアンインストールに関する注意事項 \(P. 79\)](#)

[Windows オペレーティング環境からの Web エージェントのアンインストール \(P. 80\)](#)

[UNIX システムからの Oracle iPlanet エージェントのアンインストール \(P. 83\)](#)

Web エージェントのアンインストールに関する注意事項

以下の点に注意してください。

- インストールされたすべての Web サーバのすべての Web エージェントがアンインストールされます。
- パスワードサービスおよびフォーム ディレクトリ (`pw_default`、`jpw_default`、`samples_default`) が削除されます。ただし、これらのディレクトリにはカスタマイズされたファイルが含まれている場合があるため、これらのディレクトリのデフォルト以外のコピー (`pw`、`jpw`、`サンプル`) は削除されません。

Windows オペレーティング環境からの Web エージェントのアンインストール

Windows オペレーティング環境から SiteMinderWeb エージェントをアンインストールする前に、レジストリ設定および Web エージェント構成設定のバックアップ コピーを作成することを考慮してください。

以下の点に注意してください。

- インストールされたすべての Web サーバのすべての Web エージェントがアンインストールされます。
- パスワードサービスおよびフォーム ディレクトリ (`pw_default`、`jpw_default`、`samples_default`) が削除されます。ただし、これらのディレクトリにはカスタマイズされたファイルが含まれている場合があるため、これらのディレクトリのデフォルト以外のコピー (`pw`、`jpw`、サンプル) は削除されません。

次の手順に従ってください:

1. Web サーバを停止します。
2. 以下のいずれかの手順を使用して、サーバ上のエージェントの設定を削除します。
 - ウィザードを使用して Web エージェントを設定解除するには、手順 3 に進みます。
 - コンソールベースのプログラムを使用してエージェントを設定解除するには、手順 6 に進みます。
3. [スタート] - [すべてのプログラム] - [CA] - [CA SiteMinder®] をクリックします。

Web エージェント設定ウィザードへのショートカットが表示されません。

4. ショートカットを右クリックし、[管理者として実行]を選択します。

重要: Windows Server 2008 上でこのウィザードを実行している場合は、実行ファイルを管理者権限で実行します。管理者としてシステムにログインしている場合でも、これらの権限を使用します。詳細については、お使いの CA SiteMinder® コンポーネントの「リリースノート」を参照してください。

Web エージェント設定ウィザードが開始します。

5. Web サーバ上で設定されたエージェント インスタンスのチェックボックスをオフにし、ウィザードを完了します。
6. root 権限を使用してコマンドプロンプト ウィンドウを開きます。
7. ca-wa-config.exe ファイルに移動し、以下のスイッチで実行します。
-i console
8. Web サーバ上で設定されたエージェント インスタンスを設定解除します。設定プログラムが完了するのを待ってから、手順 9 に進みます。
9. 以下のいずれかの手順を選択します。
 - ウィザードを使用して Web エージェントを削除するには、手順 10 に進みます。
 - コンソールベースのプログラムを使用して Web エージェントを削除するには、手順 15 に進みます。
10. [スタート] - [コントロール パネル] - [プログラムと機能] の順にクリックします。
インストールされたプログラムのリストが表示されます。
11. [SiteMinder Web エージェント バージョン番号] をクリックします。
12. [アンインストール/変更] をクリックします。
アンインストール ウィザードが表示されます。
13. [SiteMinder Web エージェントのアンインストール] ダイアログ ボックスの情報を確認し、次に、[アンインストール] をクリックします。
ウィザードが Web エージェントを削除します。
14. ウィザードが完了するのを待ってから、手順 17 に進みます。
15. コマンドライン ウィンドウを開きます。
16. 以下のディレクトリに移動します。

`web_agent_home`

`web_agent_home`

SiteMinder エージェントが Web サーバにインストールされるディレクトリを示します。

デフォルト (SiteMinder IIS Web エージェントの Windows 32 ビットインストールのみ) : C:\Program Files\CA\webagent

デフォルト (Windows 64 ビットインストール[IIS 用 SiteMinder Web エージェントのみ]) : C:\Program Files\CA\webagent\win64

デフォルト (64 ビット システムで稼働している Windows 32 ビット アプリケーション [IIS 用 SiteMinder Web エージェントを持つ Wow64 のみ]) : C:\Program Files (x86)\webagent\win32

17. 以下のコマンドを実行します。

```
ca-wa-uninstall.cmd -i console
```

18. アンインストールプログラムが完了するのを待ってから、手順 19 に進みます。

19. Web サーバを開始します。

重要: Web エージェントをアンインストールした後に次の場所から ZeroG レジストリ ファイルを削除します : C:\Program Files\ZeroG Registry\com.zerog.registry.xml

UNIX システムからの Oracle iPlanet エージェントのアンインストール

これらの手順は GUI およびコンソール モードを削除するためのものです。

注: 64 ビット SUSE Linux 10 システムから Web エージェントを削除するには、追加の準備が必要になります。

以下の点に注意してください。

- インストールされたすべての Web サーバのすべての Web エージェントがアンインストールされます。
- パスワード サービスおよびフォーム ディレクトリ (`pw_default`、`jpw_default`、`samples_default`) が削除されます。ただし、これらのディレクトリにはカスタマイズされたファイルが含まれている場合があるため、これらのディレクトリのデフォルト以外のコピー (`pw`、`jpw`、サンプル) は削除されません。

2 つのモードの手順は同じですが、コンソール モードについては以下に示す例外があります。

- 対応する番号を入力して、オプションを選択します。
- 各手順の後に、Enter キーを押してプロセスを続行します。

注: アンインストールの前に、バックアップとしてエージェント構成設定をコピーすることをお勧めします。

次の手順に従ってください:

1. Web サーバを停止します。
2. UNIX システムにログインします。
3. 削除するエージェントの設定を削除するために、設定ウィザードを実行します。
4. Web エージェントがインストールされているディレクトリへ移動します: `web_agent_home/install_config_info/ca-wa-uninstall`
5. アンインストールプログラムが実行権限を持っていることを確認します。たとえば、以下のコマンドを使用します。

```
chmod +x ca-wa-uninstall
```
6. コンソール ウィンドウから、以下のコマンドのうちの 1 つを入力します。

- GUI モード : `./ca-wa-uninstall`
- コンソールモード : `./ca-wa-uninstall -i console`

アンインストールプログラムが起動します。

7. ダイアログ ボックスの情報を読んで、**Web** エージェントの削除を確認し、[アンインストール] をクリックします。**Web** エージェントはシステムから削除されます。
8. [終了] をクリックして、アンインストールプログラムを終了します。
9. ホーム ディレクトリに変更します (現在のディレクトリは削除されています)。
10. **Web** サーバを再起動します。

注: Oracle iPlanet **Web** サーバの場合、`obj.conf`、`magnus.conf`、および `mime.types` ファイルはエージェントをインストールする前に元の設定にリストアされます。

第 9 章: トラブルシューティング

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Web サーバは起動するのに Web エージェントが有効にならない \(P. 85\)](#)

[Web サーバが開始すると smget エラーメッセージが表示される \(P. 85\)](#)

[再設定された Web エージェントが動作しない \(P. 86\)](#)

[Oracle iPlanet Web サーバがランタイムで失敗する \(P. 86\)](#)

[英語以外の入力文字にジャンク文字が含まれる \(P. 87\)](#)

Web サーバは起動するのに Web エージェントが有効にならない

問題の状況:

Web サーバが開始したのに Web エージェントが無効です。

解決方法:

WebAgent.conf ファイルを開いて、EnableWebAgent パラメータを [はい] に設定します。

Web サーバが開始すると smget エラーメッセージが表示される

Oracle iPlanet Web サーバで有効

問題の状況:

Web サーバを開始すると、

「shmget failed」というメッセージが表示されます。大きすぎるキャッシュを作成しようとしている可能性があります。

解決方法:

共有メモリ セグメントに推奨された調整を行います。

詳細情報:

[Solaris 10 リソース管理を調整する方法 \(P. 77\)](#)

再設定された Web エージェントが動作しない

Oracle iPlanet Web サーバで有効

問題の状況:

Web エージェント設定の変更は `obj.conf` ファイルにありません。Web エージェントは操作できません。

解決方法:

エージェント設定プログラムによって行われた `obj.conf` への変更が適用される前に、Oracle iPlanet 管理コンソールを使用してサーバの変更が行われました。Web エージェントを再設定します。

詳細情報:

[SunOne 6.1 サーバ用 Oracle iPlanet 管理サーバ コンソールを使用して Oracle iPlanet 構成ファイルに SiteMinder 変更を適用する \(P. 30\)](#)
[SunOne 6.1 サーバ用 Oracle iPlanet 管理サーバ コンソールを使用して Oracle iPlanet 構成ファイルに SiteMinder 変更を適用する \(P. 46\)](#)

Oracle iPlanet Web サーバがランタイムで失敗する

問題の状況:

Oracle iPlanet Web サーバがランタイムで失敗します。

解決方法:

StackSize 設定 (Oracle iPlanet サーバの `magnus.conf` ファイル内) の値を 256 KB に設定します。 `magnus.conf` ファイルは以下に配置されています。

`Oracle_iPlanet_home/web_server_instance/config`

英語以外の入力文字にジャンク文字が含まれる

UNIX/Linux 上で有効

問題の状況:

英語以外の入力文字の一部がコンソール ウィンドウに正しく表示されません。 -

解決方法:

コンソール ウィンドウのターミナルの設定を確認します。コンソールが入力文字の高位 (8) ビットをクリアしないことを確認します。以下のコマンドを実行します。

```
stty -istrip
```


付録 A: ワークシート

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[エージェントインストールワークシート \(P. 89\)](#)

[エージェント設定ワークシート \(P. 89\)](#)

エージェント インストール ワークシート

以下の表を使用して、エージェント インストール プログラムが必要とする情報を記録します。

必要な情報	使用する値
インストールディレクトリ	

エージェント設定ワークシート

以下の表を使用して、エージェント設定プログラムが必要とする情報を記録します。

必要な情報	使用する値
ホスト登録 (はい/いいえ)	
管理者ユーザ名	
管理者パスワード	
共有秘密キーのロールオーバーの有効化	
トラステッドホスト名	
ホスト設定オブジェクト	
IP アドレス	
FIPS モード設定	
SmHost.conf ファイル名	

必要な情報	使用する値
SmHost.conf ファイルの場所	
サーバの選択	
エージェント設定オブジェクト名	
高度な認証方式のダイアログ	